

788
631



* 0016486000 *

0016486-000

788-631

意見書報告書の書き方

山口弘三・著

新光閣

4版

昭和17

ACH

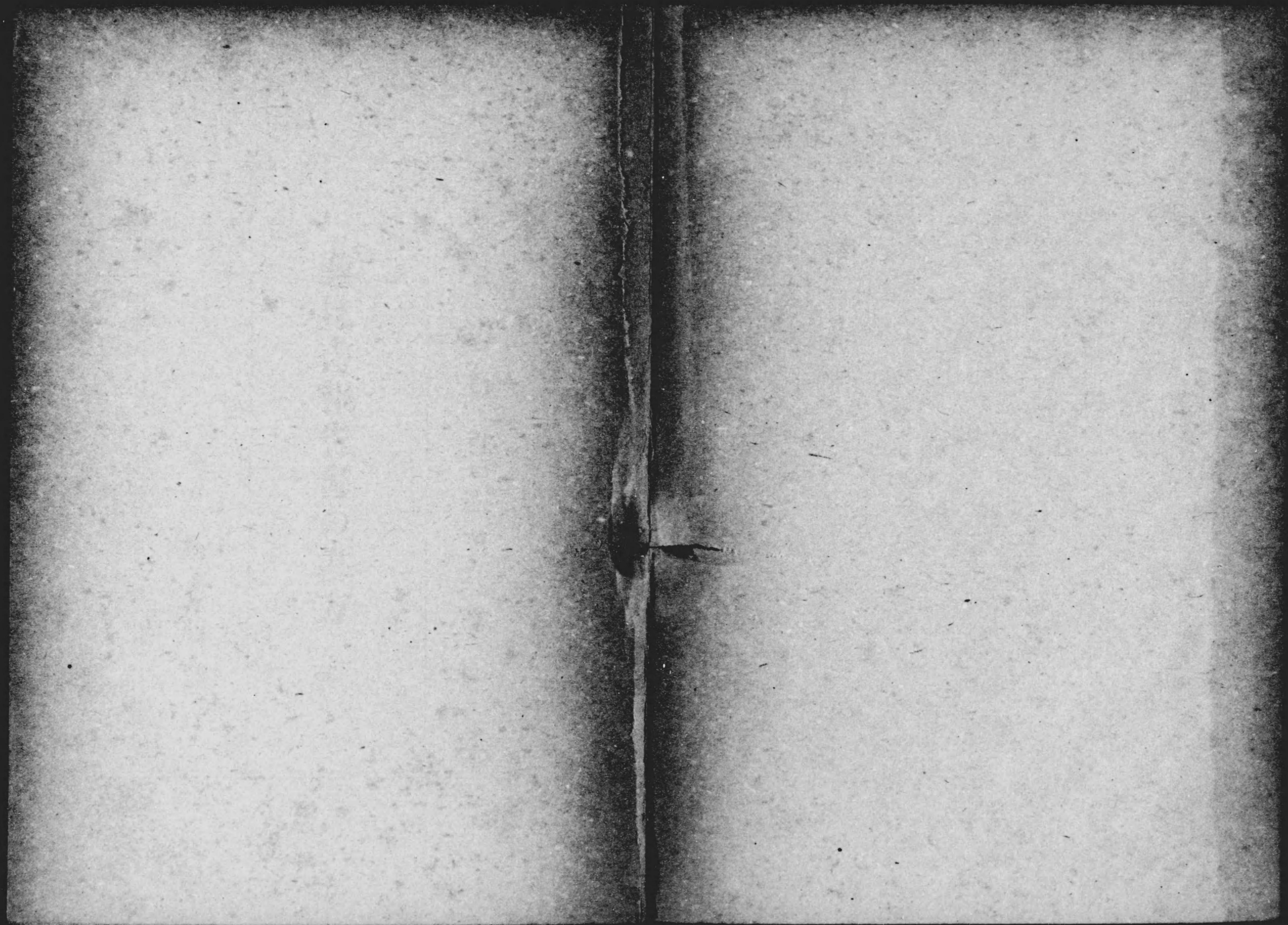
意見書の報告書の方

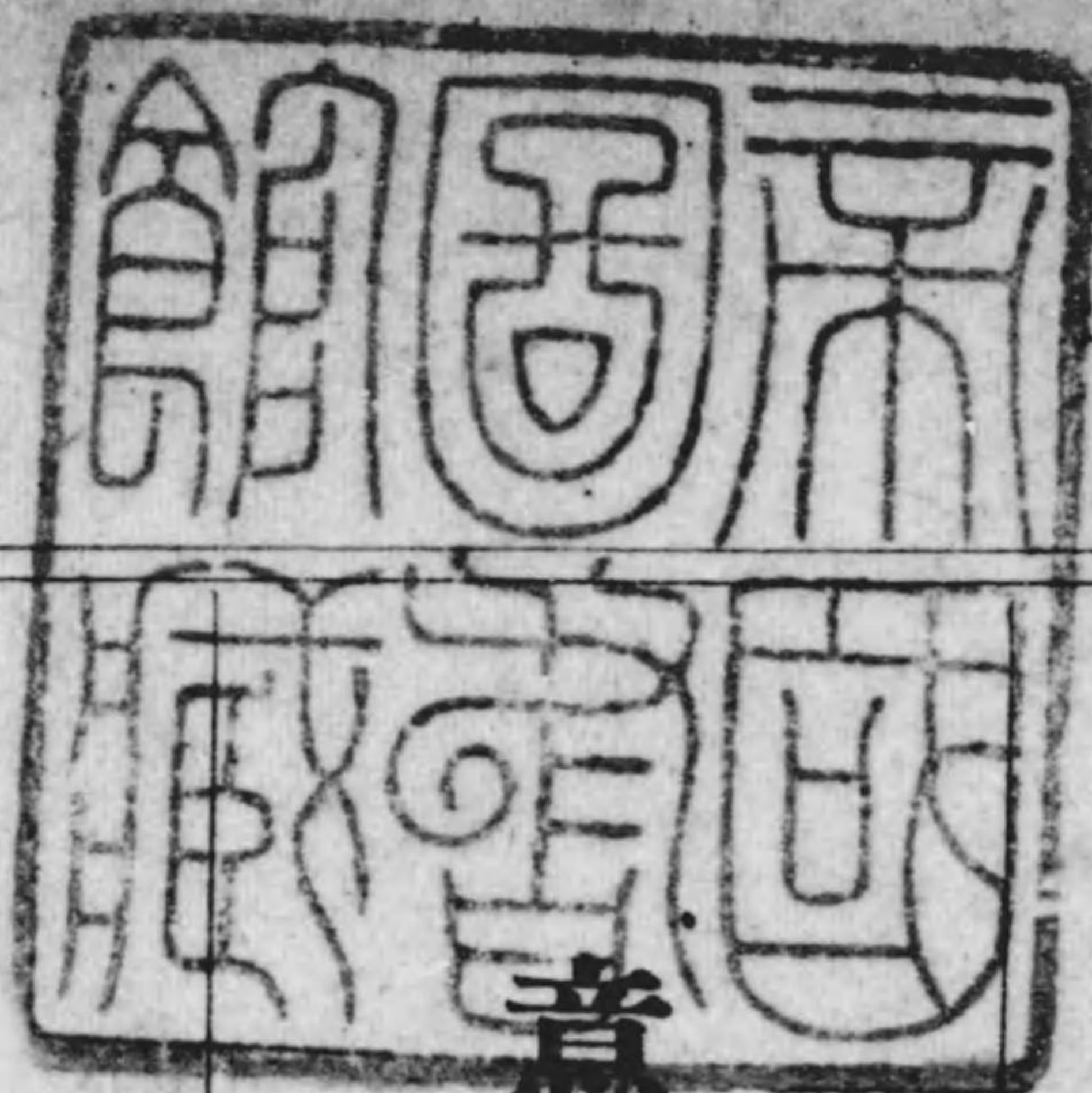
司書法記官

山 口 弘 三

著

東京新光閣發行





司法事務官 山口弘三著

意見書報告書の書方

東京 新光閣刊行



序言

○ 數年前取調の要件と意見書の書方と云ふ小冊子を書いたが之は短い警察生活の経験に基いたもので洵に不完全なものであつた。其の際大方の御教示に依り完成を他日に期し度いと述べたが本書は其の後の先輩各位の御教示と検事としての経験に基いたものである。併し素より完成までには程遠い。司法警察の實務に多少共寄與する處あれかしと希ふのみである。

○ 本書の内容として犯罪事實の實例を數多く載せたが出来るだ

け簡略なもののみを選んだ。之は書方の要領を端的に擱んで貫ふ爲である。要領さえ會得すれば複雑なものは其の應用に過ぎないのだから讀者の手腕に待たうと云ふ譯である。

昭和十四年八月

著者

意見書報告書の書方 目次

第一編 總論	
第一章 意見書	一
第二章 捜査報告書	三
第二編 各論	
第一章 公務執行妨害	四
第二章 封印、差押標示破棄(第九十六條)	五
第三章 逃走	五
第四章 犯人藏匿(第一百三條)	五
第五章 證憑湮滅(第一百四號)	六

目次

第六章 放火……………六五

第七章 失火……………七四

第八章 水利妨害(第二百二十三條)……………七七

第九章 汽車電車往來妨害(第二百五條第一項)……………八一

第十章 過失汽車電車等往來妨害……………八四

第十一章 住居侵入(第三百十條)……………八六

第十二章 通貨偽造……………九二

第十三章 公文書偽造……………九七

第十四章 私文書偽造……………一〇七

第十五章 有價證券偽造……………一二八

第十六章 印章偽造……………一三四

第十七章 偽證……………一三二

第十八章 誣告……………一三六

第十九章 猥褻、姦淫……………一三九

第二十章 賭博……………一四七

第二十一章 禮拜所不敬等……………一五三

第二十二章 瀆職……………一五八

第二十三章 殺人……………一六七

第二十四章 傷害……………一七三

第二十五章 過失傷害……………一七九

第二十六章 墮胎……………一九〇

第二十七章 遺棄……………一九七

第二十八章 逮捕監禁……………二〇一

第二十九章 脅迫……………二〇五

第三十章	略取、誘拐	二一〇
第三十一章	名譽毀損	二二六
第三十二章	信用毀損	二三〇
第三十三章	竊盜(第二百三十五條)	二三四
第三十四章	強盜	二三九
第三十五章	詐欺	二三九
第三十六章	背任	二四六
第三十七章	恐喝	二五一
第三十八章	横領	二五六
第三十九章	贓物收受等(第二百五十六條)	二六三
第四十章	毀棄隱匿	二六七

第一編 總論

第一章 意見書

第一節 意見書の意義

意見書とは司法警察官が、被疑事件を検事に送致する際同被疑事件に対する意見を記載して其の記録に添付する書類である。

司法警察職務規程第百十一條第二項 被疑事件ヲ検事ニ送致スルトキハ意見ヲ付シ且參考ト爲ルヘキ事項ヲ報告スルノ捜査書類及差押ヘ又ハ領置シタル物ハ意見書ト共ニ検事ニ送付スベシ

第二節 意見書の内容

意見書には如何なる内容を盛るべきか。其の記載事項に付て職務規程には何等規定するところがない。之は司法大臣の訓令に基き各地方裁判所の検事正が其の管轄地域内の司法警察官に訓令を以

て規定してゐる司法警察執務細則に譲られてゐる。而して細則は各地方裁判所検事正によつて各個に規定せられてゐるとは謂へ、其の内容は何處も大差なく殆ど同一である。左に其の記載事項を掲げる。

- 一、犯罪發覺ノ原因
- 二、前科、起訴猶豫、微罪處分ノ有無
- 三、兵役關係
- 四、爵位、勳章、年金、恩給等ノ有無
- 五、犯罪事實
- 六、證據
- 七、犯罪ノ情狀其ノ他參考事項
- 八、法令ノ適條
- 九、處罰ノ要否ニ關スル意見

右内容を見る時意見書は當該被疑事件の縮圖であり結論であると謂ふことが出来る。

第三節 意見書の機能

788
63₁

意見書は何の爲に作成されるものであるか。それは前述の内容に徴し容易に知ることが出来る。右の内容は、被疑者の人柄と被疑事件それ自體の内容と之に對する司法警察官の意見とに大別することが出来る。而かも名宛は檢事である。つまり意見書は當該被疑事件の全貌と之に對する第一線の捜査官たる司法警察官の意見とを直截簡明に檢事に知らしむる爲作成せられるものである。

檢事は意見書に依り事件の全貌と之に對する司法警察官の意見とを端的に掴むことが出来る。また司法警察官は之に依り該事件に對する第一線に立つた捜査官としての意見を文書に依り表明する機會を與へられる。

尙檢事は被疑者の取調に當り、意見書記載の犯罪事實を讀聞け、之に相違なき旨を認めしめ、此の事實を其の儘聴取書に録取することに依り詳細な供述の録取に替へることが出来る。更に檢事が捜査を終り事件を起訴する際、其の公訴事實に意見書記載の犯罪事實を援用することに依り、具體的な記載に替へることが出来る。つまり此の場合には公判請求書の公訴事實欄に「司法警察官意見書記載の犯罪事實」と記載しただけで用が足りるわけである。右は意見書の附隨的ではあるが極めて重要な一機能と云ふことが出来る。

第四節 意見書の書方

意見書の記載事項は前述の通りであるが、以下各事項に付書方を説明する。茲に一言しなければならぬのは、意見書の核心を爲すのは其の犯罪事實であり、各事項中犯罪事實の書方は一番難しく一番意を用ひなければならぬと云ふことである。従て意見書の書方を説明すると云ふことは即ち犯罪事實の書方を説明すると云ふに等しい。犯罪事實の書方に付ては項を改めて説明する。

第一 犯罪發覺の原因

告訴、告發、司法警察吏の認知等記載すればよい。其の具體的事情を記載する必要はない。之は司法警察吏の捜査報告書等に譲るべきである。

第二 前科、起訴猶豫、微罪處分の有無

前科のある場合は、刑の確定した年月日、言渡裁判所名、罪名、刑を記載すべく若し前科多數あり、一々之を詳記するの煩に堪えない場合は詳細を前科取調書等に譲り

大正二年以來竊盜四犯、詐欺二犯、最終昭和十三年二月十五日東京區裁判所ニ於テ竊盜罪ニヨリ懲役五年

等記載する。起訴猶豫其の他も同様である。

第三 兵役關係

豫備役陸軍砲兵上等兵、第一補充兵役陸軍歩兵、或はナシ等

第四 爵位、勳章、徽章、年金、恩給等の有無

第五 犯罪事實

別項詳説

第六 證據

被疑者が犯行を自供してゐる場合は

被疑者並關係人ノ聽取書、被害者ノ始末書、證據品等ニヨリ證明十分ナリ

等記載すれば足り、被疑者が否認してゐる場合は簡單でいいから犯行認定の基礎となる證據説明をしておく必要がある。

第七 犯罪の情狀其の他參考事項

茲には起訴、不起訴の決定、刑の量定に付參考となるべき事項を掲載する。例へば被害者に對し辨償を爲したとか、當事者間に示談成立してゐるとか、傷害罪等であれば醉餘偶發的に爲された犯行であるとか云ふ點である。

第八 法令の適條

第九 處罰の要否に關する意見

處罰の要否及其の理由を簡單に記載する。之は前にも述べた様に檢事が起訴、不起訴を決定し、又は刑の量定を爲すに付事件の摘發に當つた司法警察官の意見を参考に供する爲設けられてゐるのであるから事件をあらゆる角度から觀察し慎重に記載すべきである。

第五節 犯罪事實の書方

犯罪事實は意見書の核心を爲すものであることは前述の通りであるが、從て犯罪事實が手際よく書けてゐたら其の意見書は先づ合格と言つて差支へない。之から犯罪事實の書方に付て述べる。それには先づ犯罪事實とは一體何であるかと謂ふこと、犯罪事實は如何に構成されてゐるかと言ふことを究める必要がある。

第一 犯罪事實の意義

茲に犯罪事實とは當該被疑事件の被疑者によつて爲された犯罪行爲を意味する。

犯罪行爲とは法により刑罰を科せらるべきものとして規定せられてゐる法益を侵害する。或は法益に侵害の危険を與ふることを内容とする行爲である。從て犯罪事實とは法を適用された事實、つまり法的に觀た事實であり、換言すれば法的に價值判斷された事實であると云ふことが出来る。

第二 犯罪事實の構成

犯罪事實は如何に構成されるか。之は犯罪事實の意義から當然導き出される。

犯罪事實は行爲である。從て行爲の主體即ち犯罪者と、行爲の時と、行爲の場所とがなければならぬ。

犯罪事實は法益を侵害する、或は法益に侵害の危険を與ふる行爲である。從て被害法益の主體即ち被害者と法益に對する侵害行爲或は侵害の危険を與ふる行爲即ち加害行爲がなければならぬ。尤も此の被害者は必ずしも個人とは限らない。殺人罪、竊盜罪等の如く個人である場合もあり、賭博罪、放火罪等の如く社會である場合もあり、内亂罪、偽證罪等の如く國家である場合もある。而して加害者行爲は法の内容即ち犯罪構成即ち犯罪構成要件により定まる。

要するに犯罪事實は 一、犯罪者 二、犯罪の時 三、犯罪の場所 四、被害者 五、加害行爲によつて構成される。之を平易に犯罪事實は、誰が、何時、何處で、誰に對して、如何なる行爲を爲したかと謂ふ五つの要素を備へると謂ひ表はされてゐる。

以下右要素の各個に付て詳説する。
A、犯罪者

犯罪行爲の主體であつて起訴前は總て刑事訴訟法の用語に遵ひ「被疑者」の名を以て取扱はれる。

而して單獨犯の場合は被疑者は一名であるが共犯の場合は二名以上存在することになる。
B、犯罪の時

犯罪の時と言つても犯罪行為に着手した時、犯罪行為の終了した時、犯罪行為の結果の現れた時分に分析して考へることが出来る。その何れも犯罪の時の中に包含される。例へば被疑者Aが被疑者Bを殺害する目的で四月一日に毒を入れた餅をBに食はせ、Bは之が爲め體を損ね、同月三十日之が原因で死亡した場合犯罪の時は四月一日より同月三十日に亘るわけである。而して犯罪の時に付て一番問題になるのは公訴時効に關してである。刑事訴訟法第二百八十四條に時効は犯罪行為の終りたる時より進行すと規定されて居り、右の例で言へば被疑者Aの死亡した四月三十日から起算されるのではなく、毒餅を食はした四月一日から起算されるのである。従て犯罪の時の中で一番重要なのは犯罪行為の終つた時であると謂ふことが出来る。

C、犯罪の場所

犯罪の場所も廣範圍に亘る場合がある。例へば縣境の時で行はれた殺人犯で、被疑者Aはa縣の領内に立つてb縣の領内に立つてゐた被疑者Bに拳銃を發射し、之を殺害した場合、或は被疑者Aがa縣にあつてb縣にある被疑者Bに詐りの電報を打ちBを欺いて送金せしめ、之を騙取したと云

ふやうな場合である。斯る場合はa縣もb縣も共に犯罪の場所である。而して犯罪の場所は管轄の問題を決定する上に重要である。

刑事訴訟法第一條 裁判ノ土地管轄ハ犯罪地又ハ被告人ノ住所、居所若ハ現在地ニ依ル

D、被害者

被害者に個人、社會、國家の三つの場合あることは既に述べた。之は各犯罪の被害法益を吟味して決定さるべき問題である。

E、加害行為

之は狭い意味での犯罪行為である。例へば殺人犯であれば人を殺す行為であり、竊盜犯であれば物を盗む行為である。刑法の條文によつて決まる。

尙犯罪行為は原則として故意に爲されたもの、つまり犯意を伴ふものでなければならぬ。例外として過失傷害致死、失火等所謂過失犯にあつても犯意を伴ふことは必要でなく、之が過失によつて爲されたことが必要である。従つて故意犯に付犯意のない場合、過失犯に付過失のない場合つまり不可抗力による場合は犯罪は成立しない。

刑法第三十八條 罪ヲ犯ス意ナキ行爲ハ之ヲ罰セス但法律ニ特別ノ規定アル場合ハ此限ニ在ラス
要するに犯罪行爲は以上の要素により構成せられるのであつて、此の要素が夫々具體的に確定することに依り當該犯罪行爲の同一性が確定する。

第三 犯罪事實の書方

A、一般的注意

送致事件を處理すべき検事は意見書記載の犯罪事實を讀むことにより端的に事件の全犯を掴み捜査に付或心構へをし、又其の方針を決めるわけであつて犯罪事實は此の要求に應じて先づ第一に偽りのないものでなければならぬ。つまり捜査の結果が眞實に浮び出てゐるものでなければならぬ。意見書の犯罪事實を讀むと殺意があつて殺したことになつてゐるのに、被疑者の聽取書其の他には殺意のあつたことが全然出てゐないと云ふやうなことは嚴に避けなければならぬ。第二に簡潔にして該犯罪の構成要素を完備し、然も其の経緯が一應具體的に看取されるものでなければならぬ。以下第二の點を詳説する。

(1) 簡潔を旨とすること

犯罪事實は簡潔に書かれなければならない。簡潔とは要を充たして冗を省くことである。粗漏と

異なること勿論である。

第一例

被疑者田中四郎ハ千葉市ニ生レ同所ニ於テ高等小學校卒業後無斷家出シ運送店其ノ他ニ雇ハレ東京市内ヲ轉々シ昭和十年五月同市江戸川區小岩町二丁目十五番地土木請負業村田豊太郎方ニ身ヲ寄セ其ノ配下トシテ喧嘩口論ヲ事トシ居タルカ昭和十二年七月三日午後八時三十分頃同市下谷區御徒町二丁目三番地ニ居住スル友人上中良助ヲ訪ネテノ歸途上野廣小路ヲ通行中折柄御用聽ノ途中自轉車ニテ同所ヲ通り蒐リタル同町一丁目三百五十二番地青物商中村喜助方店員市村信造當十八年カ道路ニ遊ヒ居タル子供ヲ避ケントシテ過チテ自己ニ突當リタルヲ怒リ「此ノ野郎」ト怒鳴リツツ其ノ胸倉ヲ執リテ之ヲ詰問シタル上同人カ體軀矮少ニシテ勿論之ニ抵抗スル力ナク且八方陳謝シタルニ拘ラス所携ノ竹製ステッキヲ以テ數回之ヲ毆打シ因テ右信造ノ前額部等ニ治療日數約十日ヲ要スル傷害ヲ負ハシメタルモノナリ

右の犯罪事實は大體整然と書き表はされてゐるが簡潔とは言ひ得ない。第一に被疑者の經歷をそれ

程精しく表す必要はない。第二に此の場合犯行當時被疑者は何の爲に現場に居つたかを明にする必要はない。單に「通行中」で十分である。被害者に付ても同様のことが言へる。第三に被害者が被疑者に突當つた事情を詳述する必要はない。只被害者が故意に突當つたとすると被害者自身犯行の動機を與へたことになり犯情に影響して來るから單に過つて突當つたことを明にしておけば十分である。第四に突當つた後の被害者の態度であるが、之も濟まなかつたと頭を下げたのか或は被疑者に詰問され、之に突掛つて行つたのか此の點簡單に表はしておけば十分である。それで

第二例

被疑者田中四郎ハ東京市江戸川區小岩町二丁目十五番地土木請負業村田豊太郎ノ配下トシテ同家ニ寄寓シ日頃喧嘩口論ヲ事トシ居ルモノナルトコロ昭和十二年七月三日午後八時三十分頃同市下谷區上野廣小路ヲ通行中折柄自轉車ニテ同所ヲ通り蒐リタル同區御徒町一丁目三百五十二番地青物商中村喜助方店員市村信造當十八年カ過チテ自己ニ突當リタルヲ怒リ其ノ胸倉ヲ執リテ詰問シタル上同人カ八方陳謝スルヲモ顧ミス所携ノ竹製ステッキヲ以テ之ヲ數回毆打シ因テ右信造ノ前

額部等ニ治療日數約十日ヲ要スル傷害ヲ負ハシメタルモノナリ

とすれば始めて簡潔になる。其處で如何なる點に意を用ふれば記述の簡潔を期し得るかと云ふ問題であるが

第一は簡にして要を得た字句を使用することである。之は日頃の勉強に待つ外の外はない。

第二は記述の順序を整へることである。之は總て (一)誰が (二)何時 (三)何處で (四)誰に對して (五)何をしたかの順序に依ればよい。記述の本筋に付ても、又各附屬句に付ても同様である。

第三は先に述べた犯罪の構成要件を完備し、而かも其の経緯が一應具體的に看取されると云ふ見地より極力冗を省くことに意を用ひることである。右第一例と第二例とを比較するに第二例の方は随分縮められてゐるに拘らず、右の見地よりして内容に少しも遜色がない。之も結局平素の勉強により上達を期するの外はない。要するに右の見地よりして何れの一點を取つて見るも無駄がない。皆夫々何等かの役割を果してゐると云ふ書方をすることが肝要である。尙記述の簡潔を期する上に

於て極めて重要な役割を演ずる (一)被疑者を主格として一貫すること (二)經過的記述と説明的記述の併用の二點に付ては後に項を改めて説明する。

(2) 犯罪事實の構成要素を完備すること

犯罪事實の構成に付ては既に述べた。捜査の結果犯罪の不成立が明らかになつた場合は別として、犯罪の成立が明かにされた以上此の犯罪事實とは凡そ前述の各要素より構成せられるものであるから犯罪事實の記載に此の要素を缺くことは出来ない筈である。更に此のことは先にも述べた通り事件の同一性を定める上からも要求せられる。AがB方でB所有の現金二十圓を竊取したと云ふことは長い年月の間に數回あるかも知れない。之がAは昭和十三年三月一日水戸市仲町B方でB所有の現金二十圓を竊取したとなると同一性がはつきり確定する。故に犯罪事實の記載には、原則として被疑者、犯罪の時、犯罪の場所、被害者、加害行為の五要素全部を完備しなければならないのである。

而して實際問題として各種の犯罪行為に即して各其の構成要素を、殊に其の加害行為の内容を誤りなく且つ漏れなく摺むと云ふことは簡単なやうで實は相當頭の要る問題である。之は法律を良く理解し會得することによつてのみ果される。從て犯罪事實の記載に付法律を知ると云ふことが最も根本的な問題であると云ふことが出来る。

(3) 事件の経緯が具體的に看取せられるやう心掛けること

犯罪事實は具體的に書かれなければならない。刑罰は抽象的な若くは觀念上の事實に向けられるものではなく、あくまで具體的な若くは現實の犯罪行為に向けられるものである以上、犯罪事實の記載が具體的でなければならぬことは當然である。

犯罪事實は其の構成要素を機械的に羅列することを以て足れりとすべきではない。犯罪は一の社會現象である。其の發生には必ずや社會的な原因がなければならぬ。而して社會的に經過し、社會的な結果を生ずる、其の全體が其の儘刑罰の對象として取扱はれる。從て犯罪事實の記載はそれが一通り社會現象としての経緯を看取し得るものでなければならぬ。

一方同じ犯罪であつても其の手口、被害の程度、被害者の立場、態度等により犯情を異にする。

犯罪事實の記載には之等の點に氣を配ることも必要であつて、事件の経緯が具體的に看取せられるやう記載すると云ふことは此の要求にも應ずることになる。

第三例

被疑者田中四郎ハ昭和十一年七月三日午後八時三十分頃東京市下谷區上野廣小路ニ於テ市村信造ヲ傷害シタルモノナリ

之は構成要素を機械的に羅列したに過ぎない。記載が抽象的で具體的でない。如何なる理由から、被害者の何處を、何を用ひて、何の程度に傷害したのか、事件の経緯が全く不明である。從て其の犯情も少しも表はれてゐない。それを前述第二例のやうに書けば被疑者の人と爲り、傷害するに至つた事情、兇器、犯行の狀況、被害の部位、程度等總て之を具體的に知ることが出来る。

B、各構成要素に付ての注意

(1) 被疑者

被疑者は犯罪の主體であり、犯罪事實の記載に付ては其の主格となる。而して單獨犯の場合は一

名であり、共犯の場合は數名あるわけで單獨犯の場合は「被疑者田中四郎ハ」と書出し、共犯の場合には「被疑者田中四郎、上中朝吉、森信造ハ共謀ノ上」と書出すのが普通である。共犯であつて共同正犯でなく一人は正犯で一人は教唆犯若くは從犯と云ふやうな場合は第一、第二と項を改めて書く。詳細は實例に譲る。

(2) 犯罪の時

例へば「昭和十三年一月十五日午後六時頃」と書く。犯罪行爲に着手した時、終了した時、結果の發生した時の間に隔りのある場合は其の各々を経過的に明にしなければならぬ。就中犯罪行爲の終了した時は時効の起算點になるから一番重要である。犯罪の時が判然しない場合がある。昭和十二年七月上旬頃と云ふことは判明してゐるが、七月の何日か不明である。又昭和十三年春頃と云ふことは判明してゐるが何月か不明であると云ふ場合等である。之等の場合であつても犯罪の場所、被害者等の關係から多く事件の同一性は確定される。從て之等の場合は「昭和十一年七月上旬頃ノ午後六時

頃」若くは「昭和十三年春頃」と書けばよい。

(3) 犯罪の場所

例へば「東京市下谷區御徒町二丁目三番地上中良助方ニ於テ」「東京市下谷區御徒町二丁目三番地先道路ニ於テ」等と書く。番地等が判然しない時は「奈良縣山邊郡丹波市町大字勾田吉田信太郎方裏手山林ニ於テ」等と書く場合もある。要するに何等かの形に於て其の場所が確定されよばよい。前に述べたAがa縣にあつてb縣にあるBに詐りの電報を打ちBを欺いて送金せしめ、之を騙取したと云ふやうな場合はAが電報を打つた場所もBが之を見て送金の手續を執つた場所も更にAが金を受取つた場所も明かにすべきである。

(4) 被害者

竊盜等であれば「小林三郎所有ノ現金二十圓ヲ竊取シ」と云ふ具合に書くが被害者は個人のみに限らず社會や國家の場合もあり、且被害法益並被害の態様は各種犯罪により異なるわけで、之等被害者を如何に書き表すかと云ふことは一様には言ひ得ない。各種犯罪に付實例を参照されたい。

(5) 加害行爲

これこそ犯罪の種類により總て内容を異にする。故に概括的に其の書方を述べることは不可能である。要は實例に付夫々の型を知つて戴くの外はない。

C、特殊犯罪に付ての注意

(1) 動機犯

犯罪には總て之を敢てするに至つた動機がある筈である。其の中で犯情の點より動機が特に重要視せられる犯罪がある。殺人、放火等である。之等の犯罪事實には必ず犯罪の動機を簡明に記載しななければならない。

(2) 知情犯

特に或る事情を知つて爲したと云ふことを明記する必要のある犯罪がある。贓物罪等は之である。假りに知情犯と名付ける。或る事情を知ると云ふことは結局犯意を有すると云ふことである。殺人罪とか傷害致死罪のやうに、殺意の有無により罪名を異にするやうな場合は別として、多くの

場合特に犯意を有すると云ふ點までは明記しない。例へば竊盜罪の成立には犯人が其の財物は他人の物であると云ふことを知つて竊取することが必要である。若し犯人が其の財物を自分のものと誤信して取つて來たら竊盜罪は成立しない。併し此の場合單に「A所有ノ金側懷中時計一箇ヲ竊取シタリ」と書くだけで「A所有ノ金側懷中時計一箇ヲ其ノ事實ヲ知リテ竊取シタリ」とは書かない。之は他人の物を自分の物と誤信して取つて來ると云ふやうなことは極めて稀な例外に過ぎないからである。處が贓物罪は反對である。一般的に言つて物を買入れるのにそれが不正な品だと云ふのは例外である。然もその例外の場合に於てのみ贓物故買罪は成立する。従て此の場合は特に被疑者が不正な品、つまり贓品であることを知つて買ったと云ふことを明示する必要がある。

(3) 目的犯

特に或目的を以て或行爲が爲されたと云ふことが犯罪構成要件の一となつてゐる犯罪、例へば誣告罪、背任罪等の如きである。此の場合には特に其の目的を明記しなければならない。

(4) 身分犯

一定の身分が犯罪構成要件の一になつてゐる犯罪がある。業務上横領、業務上過失傷害致死、瀆職等の如きである。業務上横領罪の成立には被疑者が横領の目的物たる金品を占有すべき業務を有すると云ふ一の身分を必要とし、瀆職罪の成立には被疑者が公務員たるの身分を有するか、或は賄賂交付罪の如く交付を受けた者が公務員たるの身分を有することを必要とする。此の場合は必ず其の身分を明記しなければならない。

(5) 營業犯

或行爲を營業として爲すことにより成立する犯罪が之である。特別法に多い。免許を受けずして營業を爲し、免許を受けずして古物商營業を爲す等の犯罪である。而して大審院は反覆繼續の意思を以て或行爲を爲せば營業として爲したものと解してゐる。従て或行爲を數回繰返へした場合は勿論營業犯として認めるに十分であるが、唯一回爲された場合にも他に反覆繼續の意思を以て爲したことを認め得る資料例へば醫療機械を整へたと云ふ様な事情があれば營業として爲したものと認めることが出来る。營業犯の場合には以上述べたやうな資料を明記し反覆繼續の意思を以て或行爲を

爲したと云ふことを具體的に明にしなければならない。

(6) 過失犯

過失犯の成立には法益の侵害が被疑者の過失に因つて生じたことが必要である。過失とは法上要求せられる注意義務の違反である。而して過失は被疑者に依つて爲された具體的事實に即して認定されなければならない。從て過失犯の犯罪事實を記述するには先づ犯罪發生直前の狀況を述べ、斯る狀況に於て被疑者が如何なる注意義務を課せられてゐるかを述べ、其の注意義務に違反した事實と之に因り惹起した事實並被害者がその爲如何なる被害を蒙つたかを明にすべきである。尙實例を参照され度。

(7) 共同正犯(刑法第六十條)

二人以上共同して犯罪を實行した場合である。此の場合は例へば「被疑者A、B、Cハ共謀ノ上」と尠くとも其の書き出しに於ては共犯者全部を同格に取扱ひ、各共犯者の擔當した犯罪が夫々異なる場合例へば一人が金品を盗み出し、一人が外部で見張りをしたと云ふやうな場合は順次之等の事實を明にしなければならない。

(8) 教唆犯(刑法第六十一條)

教唆犯は他人をして犯罪を敢行するの決意を爲さしめ、之を實現せしめることに依つて成立する犯罪である。教唆犯は教唆を受けたものが其の犯罪を實行することに依り成立するのであつて教唆を受けたものが犯罪を實行しなかつた場合は成立しない。故に教唆犯の犯罪事實を記述するには教唆した時と場所を明にすると同時に被教唆者が何時何處で其の犯罪を實行したかを明にしなければならない。

(9) 從犯(刑法第六十二條)

正犯を幫助することによつて成立する犯罪である。幫助とは犯行を容易ならしめることである。

大正六年大審院判例

從犯ハ犯罪ノ實行行爲ニ屬セサル行爲ヲ以テ正犯ノ實行行爲ヲ幫助スルニ因リ成立ス而シテ從犯ノ行爲ハ正犯

ノ實行者手後ニ於テ行ハルルコトヲ妨ケスト雖モ其實行者手前ニ在ルヲ以テ通例ト爲ス

而して従犯は正犯に従屬して成立する犯罪であること教唆犯と同様であるから犯罪事實の書方は大體教唆犯に付て述べたと同様である。従犯を構成する内容を明にすると同様に正犯の存在を明にしなければならぬ。

(10) 未遂犯(刑法第四十三條)

犯罪の實行に着手し之を遂げなかつた場合である。如何なる行爲のあつた場合實行の着手と認めらるかは法律問題であつて一概には言ひ得ない。竊盜であれば金品を物色する行爲のあつた場合(單に屋内に侵入したゞけではそれが竊盜の目的であつても竊盜未遂とはならない)詐欺罪であれば欺罔行爲に着手した場合、放火罪であれば放火の目的物に或は之に仕掛けた導火材料に火を移した場合等である。而して未遂犯の犯罪事實を書くには實行の着手と認むべき事實を明にすることが最も肝要である。

(11) 連續犯(刑法第五十五條)

犯意繼續して同一罪名の犯行を繰返へした場合である。此の場合には其の一つ一つを項を改めて列記する必要がある。尤も其の數が餘りに多い時は意見書の本欄には總括的に記載し其の末尾に犯罪表を添附するか、司法警察吏の捜査報告書に詳記せしめ意見書には之を總括して記載するのみの方法である。實例を参照あり度い。

D、被疑者を主格として一貫すること

犯罪事實の記載を簡明にする一つの方法である。犯罪事實とは當該被疑者の犯した犯罪行爲であるから其の被疑者が主體であることは勿論であり、從て之を文章に書き表す場合被疑者が主格たるべきは謂ふを待たない。而して意見書には往々被疑者何某はと書き出して先づ之を主格として取扱ひながら次に被害者を主格として取扱ふなど一貫しない爲意味のよく通じない場合が尠くない。

第四例

被疑者宮本吉太郎ハ友人千葉市寒川二百九十五番地古物商中山重助ヨリ同市登戸農太田市太郎カ
古代出土品ノ愛好家ナルコトヲ聞キ模造品ヲ以テ金員ヲ騙取センコトヲ企テ右中山ニ對シ右太田

ニ紹介方依頼シタルトコロ中山ハ之ヲ承諾シ太田方ニ同道スヘキ旨約シ昭和十三年七月十二日午後二時頃被疑者宮本ヲ伴ヒ太田方ニ到リ被疑者ハ持参シタル自己所有ノ模造曲玉ヲ同人ニ示シ該曲玉ハ埼玉縣秩父郡ノ古墳ヨリ出土シタル千數百年前ノ品ナル旨申向ケタルカ太田ハ之ヲ見テ其ノ模造品ニ非ルヤヲ疑ヒ買受方ヲ躊躇シタリ仍テ同日ハ該曲玉ヲ同人ニ預ケタル儘一旦引上ケ同月十八日自ラ上野驛ヨリ自分宛ニ「マガタマニコ五〇〇」ニテカイタシサトウト打電シ翌十九日再ヒ太田方ニ到リ同人ニ對シ右電報ヲ示シ東京ノ骨董屋ヨリ買受ノ電報着シ居ルニ付至急確答セラレ度キ旨申向ケタルトコロ同人ハ之ニヨリ該曲玉ヲ以テ眞實秩父郡ノ古墳ヨリ出土シタルモノト誤信スルニ至リ之ヲ金五百圓ニテ買受ケ右金員ヲ被疑者ニ交付シ被疑者ハ之ヲ騙取シタルモノナリ

右の犯罪事實を一讀するに文章の主格ハ 一、被疑者 二、中山 三、被疑者 四、太田 五、被疑者 六、太田 七、被疑者と順次變化してゐる爲内容錯雜して容易に捕捉し得ない。之を

第五例

被疑者宮本吉太郎ハ古物商ヲ營ムモノナルトコロ營業不振ニシテ生活ニ窮シ居タル折柄友人中山重助ヨリ千葉市登戸農太田市太郎ハ古代出土品ノ愛好家ナルコトヲ聞知スルヤ模造品ヲ以テ金員ヲ騙取センコトヲ企テ右中山ニ對シ同太田ニ紹介方依頼シ昭和十三年七月十二日午後二時頃中山ニ伴ハレテ右太田方ニ到リ持参シタル模造曲玉二箇ヲ同人ニ示シ該品ハ埼玉縣秩父郡ノ古墳ヨリ出土シタル千數百年前ノ品ナル旨申向ケタルニ太田カ之ヲ見テ其ノ模造品ニ非ルヤヲ疑ヒ買受方ヲ躊躇シタルヨリ同日ハ右品ヲ同人ニ預ケタル儘一旦引上ケ同月十八日自ラ上野驛ヨリ自己宛ニ「マガタマニコ五〇〇」ニテカイタシサトウト打電シ翌十九日再ヒ太田方ニ到リ同人ニ對シ右電報ヲ示シ東京ノ骨董屋ヨリ買受ノ電報着シ居ルニ付至急確答セラレ度キ旨申向ケ同人ヲシテ右品ヲ以テ眞實秩父郡ノ古墳ヨリ出土シタルモノト誤信セシメ因テ同人ヲシテ該模造曲玉二箇ノ買受方ヲ承諾セシメ即時其ノ代金トシテ金五百圓ヲ交付セシメテ之ヲ騙取シタルモノナリ

とすれば内容は全く前と同様でも讀むものをして直に事件の經過的内容を諒知せしめる。第四例と第五例を比較對象して、如何なる語法を用ひ被疑者を終始主格として維持するかを研究會得され度

5.

E、經過的記述と説明的記述

犯罪事實の記述に經過的記述と説明的記述とが考へられる。經過的記述とは例へば被疑者が四月一日に被害者Aより重大な侮辱を加へられ、四月十五日にAを殺害しやうと決意し、四月十六日兇器を準備し、四月十八日Aを殺害したと云ふやうに事件の發端より終了までを順を追ふて經過的に記述する方法であつて第一幕は被疑者がAより重大なる侮辱を蒙るの場、第二幕は被疑者がAを殺害せんと決意するの場、第三幕は被疑者が兇器を準備するの場、第四幕は大詰被疑者がAを殺害するの場と事件の經過を數個の場面に區切り、各場面を順を追ふて展開させる、芝居に所謂段物の手法である。説明的記述とは、例へば被疑者は四月十八日匕首でAを殺害した。Aと云ふ人間は同月一日被疑者に重大な侮辱を加へた爲、同月十五日被疑者に於て之を殺害しやうと決意してゐた人間であり、使用した匕首は同月十六日被疑者が新宿の夜店で買つて來て携へてゐたものであると云ふ具合に所謂一幕物の手法で殺害の場面だけをとり上げて一切の經過事情等を此の場面一つに織込んでしまふのである。

でしまふのである。

經過的記述は讀む者に判り易いが、文章がだらだらして間が伸びて來る嫌ひがあり、説明的記述は文章はひきしまつて來るが其の構成が複雑になり判り難い場合が出て來る。故に文章がひきしまつて居り、然も判り易いと云ふ記述を爲すには此の二つの手法を適度に併用することが肝要である。たゞ意見書の犯罪事實は、判決や起訴狀の犯罪事實と異り事件の經緯を相當詳細に表す必要があるから何れかと言へば經過的記述を主とすべきである。

第六例

被疑者小川金藏ハ數年來土工ヲ爲シテ東京府下ヲ轉々シ性粗暴ニシテ傷害恐喝等ノ前科四犯ヲ有スルモノナルトコロ昭和十三年三月十六日ヨリ東京市江戸川區小岩町江戸川橋架改工事ニ土工トシテ雇ハレ同所大塚組飯場ニ止宿シテ該工事ニ從事中同月十八日上中徳一當三十五年モ亦同工事ニ土工トシテ雇ハレ同飯場ニ止宿シ居タルカ同年四月一日該工事場ニ於テ右上中ト些細ノコトヨリ口論ヲ爲シ同人ヨリ前科者ト罵ラレタルヲ怒リ傍ニ在リタル棒切ヲ持チテ之ニ立向ヒタルモ上

中ハ居合セタル者ノ計ヒニヨリ姿ヲ晦シタルヲ以テ其ノ後同人ノ所在ヲ捜シ居タル折柄同月十五日同飯場ニ訪ネ來タル友人同區平井町三丁目五番地土木請負業山田太郎方三好信造ヨリ上中カ右山田方ニ居ル旨開知スルヤ上中ヲ殺害シテ鬱憤ヲ霽サンコトヲ決意シ翌十六日夜平井町一丁目先露店ニテ双渡約八寸ノ匕首ヲ購入シ同月十八日午後八時頃右匕首ヲ携ヘテ前記山田方附近ヲ徘徊シ居タル際偶々上中カ同家ヨリ出テ來リタルヨリ素早く其ノ背後ニ迫リ「野郎ツ」ト叫ビツツ右匕首ヲ以テ矢庭ニ上中ノ左腰部ヲ突刺シ之ヲ殺害シタルモノナリ

右の犯罪事實は純然たる經過的記述であるが記述全體としてしまりなく、又且つ中心が浮び出てゐない。之を純然たる説明的記述に改めると次のやうになる。

第七例

被疑者小川金藏ハ數年來土工ヲ爲シテ東京府下ヲ轉々シ性粗暴ニシテ傷害恐喝等ノ前科四犯ヲ有スルモノナルトコロ昭和十二年四月十八日午後八時頃「東京市江戸川區小岩町江戸川橋架改工事場大塚組飯場ニ同年三月十八日ヨリ同宿シ居リ同年四月一日同工事場ニ於テ口論ノ末前科者ト罵

倒セラレタルヨリ深ク恨ミ居タル」上中徳一當三十五年ヲ殺害シ鬱憤ヲ霽サントシテ「同月十六日夜同區平井町一丁目先露店ニテ購入シタル」双渡約八寸ノ匕首ヲ携ヘ「同人カ寄寓シ居ル旨同月十五日同飯場ニ訪ネ來リタル友人三好信造ヨリ開知シタル」同町三丁目五番地土木請負業山田太郎方附近ヲ徘徊シ居タル折柄偶々上中カ同家ヨリ出テ來リタルヨリ素早く其ノ背後ニ迫リ「野郎ツ」ト叫ビツツ右匕首ヲ以テ矢庭ニ上中ノ左腰部ヲ突刺シ之ヲ殺害シタルモノナリ

右の犯罪事實は四月十八日の犯行の場面だけを取上げて之に登場する被害者上中徳一に對しては、「東京市江戸川區小岩町江戸川橋架改工事場大塚組飯場ニ同年三月十八日ヨリ同宿シ居リ同年四月一日同工事場ニ於テ口論ノ末前科者ト罵倒セラレタルヨリ深ク恨ミ居タル」と云ふ長い説明句を附し、匕首に對しても「同月十六日夜同區平井町一丁目先露店ニテ購入シタル」と説明を加へ、犯行現場に對しては「同人カ寄寓シ居ル旨同月十五日同飯場ニ訪ネ來リタル友人三好信造ヨリ開知シタル」と之亦長い説明句を附して一切を明かならしめてゐる。從て文章の構成が複雑して居り一讀しただけでは意味がよく通じない。其處で之を折衷して

第八例

被疑者小川金藏ハ數年來土工ヲ爲シテ東京府下ヲ轉々シ性粗暴ニシテ傷害恐喝等ノ前科四犯ヲ有スルモノナルトコロ東京市江戸川區小岩町江戸川橋架改工事ニ雇ハレ同所大塚組飯場ニ止宿シテ該工事ニ從事中昭和十二年四月一日該工事場ニ於テ該飯場ニ同宿シ居タル土工上中徳一當三十五年ト些細ノコトヨリ口論ヲ爲シ同人ヨリ前科者ト罵倒セラレタルヲ怒リ傍ニ在リタル棒切ヲ持チテ之ニ立向ヒタルモ同人ニ於テ逸速ク姿ヲ晦シタルヲ以テ其ノ所在ヲ搜シ居タル折柄友人同區平井町三丁目五番地土木請負業山田太一郎方三好信造ヨリ上中カ右山田方ニ居ル旨聞知セルヨリ之ヲ殺害シテ鬱憤ヲ霽サンコトヲ決意シ同月十八日午後八時頃豫メ同町一丁目露店ニテ購入用意シ在リタル刃渡約八寸ノ七首ヲ携ヘ右山田方附近ヲ徘徊シ居タル際偶々上中カ同家ヨリ出テ來リタルヨリ素早く其ノ背後ニ迫リ「野郎ツ」ト叫ヒツツ右七首ヲ以テ矢庭ニ上中ノ左腰部ヲ突刺シ之ヲ殺害シタルモノナリ

とし被疑者が右犯行を決意するに至つた動機、即ち被害者に罵倒された場面と犯行の場面の二場面

だけを取上げ他は全部説明句により明にし經過的記述と説明的記述とを適宜に併用すれば判り易くもあり、又文章も犯行の場面を中心にひきしまつて來るのである。

第九例

意見書

本籍 千葉市寒川五十一番地

住所 東京市本所區綠町五丁目十五番地

無職

詐欺

被疑者

表

谷忠助
當 二十九年

一、前科起訴猶豫微罪處分ノ有無

前科ナシ

昭和十一年七月四日東京區裁判所檢事局ニ於テ詐欺罪ニ依リ起訴猶豫處分ヲ受ク

二、爵位勳章徽章年金恩給等ノ有無

第一章 意見書 第五節 犯罪事實の書方

ナシ

三、兵役關係

ナシ

四、犯罪發覺ノ原因

司法警察吏ノ認知

五、犯罪事實

被疑者森谷忠助ハ昭和十一年四月十五日正午頃東京市本所區兩國橋際朝日食堂ニ於テ偶然知合ヒタル同市四谷區鹽町三百九十五番地會社員吉田一郎方女中清水すみ當十九年ヨリ同女ハ其ノ主人カ大阪へ轉勤ヲ命セラレタルニヨリ一兩日中實家ニ戻ルコトニナリ本所ニ在住スル實兄清水吉五郎ヲ訪ネ來リタルモノナル旨聽込ムヤ右すみノ所持品ヲ騙取センコトヲ企テ同日午後一時頃右吉田方ニ到リ同人妻春子ニ對シすみノ兄清水吉五郎ノ依頼ニヨリすみノ所持品ヲ受取ニ來リタル旨申向ケテ右春子ヲ欺キ因テ同人ヲシテ清水すみ所有ノ銘仙女物拾一枚外衣類雜品

合計二十一點（價額合計約百三十圓相當）ヲ交付セシメ之ヲ騙取シタルモノナリ

六、證據

被疑者、被害者ノ各聽取書、關係人ノ各始末書、證據物件等ニ依リ證據十分ナリ

七、法律ノ適用

刑法第二百四十六條第一項

八、犯罪ノ情狀意見

被疑者ハ前回既ニ同種犯罪ニ依リ起訴猶豫處分ヲ受ケ嚴重訓戒セラレ居ルニ拘ラス改悛ノ模様ナク正業ニ就クヲ好マス常ニ無賴ノ徒ト交リ又々本件犯罪ヲ重ヌルニ至リタルモノニシテ嚴重科刑ノ要アルモノト思料ス
右意見及開陳候也

昭和十三年四月二十一日

A 警察署

司法警察官警部 安部 忠 ㊦

第二章 捜査報告書

第一節 捜査報告書の意義

捜査報告書は犯罪捜査の最前線に立つ司法警察吏、通常刑事係巡査が司法警察官たる警察署長に捜査の結果を報告する捜査書類である。

捜査報告書に付て司法警察職務規範には何等の規定がない。強ひて其の根據を求めらば

第二十七條 司法警察吏又ハ其ノ職務ヲ行フ者犯罪アリト思料スルトキハ直ニ司法警察官又ハ其ノ職務ヲ行フ者ニ報告シテ指揮ヲ請フヘシ但シ豫メ捜査ノ命令アリタル場合ハ必要ナル捜査ヲ爲シタル上遲滯ナク其ノ旨ヲ報告スヘシ

に歸するであらう。

第二節 捜査報告書の内容

捜査報告書には如何なる内容を記載すべきか。之は意見書と違ひ執務細則にも規定されないのが普通である。要は實際上の必要を充たすだけの内容を盛ればよい譯である。一般に其の内容として考へられるものは

- 一、被疑者の本籍住所職業氏名年齢
- 二、前科
- 三、経歴
- 四、捜査の端緒経過
- 五、犯罪の動機
- 六、犯罪事實
- 七、證據の蒐集に關し特に報告すべきことあらば其の事實

等である。

第三節 捜査報告書の書方

捜査報告書には一定の書式がない。従て報告内容を簡單明瞭に記載すべしと云ふの外はない。尙二、三注意を述べる。

捜査報告書は實際捜査に當つた司法警察吏の名義に於て作成せらるべきである。捜査に當つて居ないものが名前を載せることは絶対に避けなければならない。事件が公判に廻つた時捜査に當つた司法警察吏が證人に呼ばれることは珍しくない。判事、檢事又は辯護人が誰が捜査に當つたかを知るには先づ捜査報告書の作成名義に依る。斯くして萬一捜査に何等關係のないものが證人に呼ばれたとしたら果して如何なる結果を齎すであらうか。

捜査の端緒は妨げなき限り具體的に記載しなければならない、捜査の端緒如何は事件の心證に重大な影響を持つものである。故に單に「認知」と云ふやうな抽象的な記載をせず如何にして認知

したかを具體的に記載する必要がある。

例へば被疑者が昭和十二年三月十五日午後十一時頃A町筋を徘徊してゐるのを認めたとが舉動不審に思はれたので住所氏名等を訊し、所持品を改めたるに贓品とおぼしき銀側懐中時計三箇を所持して居たので署に同行し其の出所を追及した處犯行一切を自供するに至つたとか、或は被疑者は一定の職業を有せざるに相當の生活を爲し居り、深夜何處よりか歸宅すること多く舉動不審なりとの風評を聞込み内偵中昭和十二年四月五日A町B質店に金側腕巻時計一箇及寶石入金指環二箇を入質した事實を突止めたので右品の被害者を捜査した結果遂に之を發見するに至つたので被疑者を署に同行し追及した處犯行一切を自供した。

と云ふ具合である。

動機犯は勿論總ての犯罪に付て其の動機は事件の心證、又は情狀に重大な關係を持つ。従て之を明にしておく必要がある。

一番骨の折れるのはやはり犯罪事實である。之は第一章に於て述べたところを會得して戴けば十

分である。唯捜査報告書は意見書と異り一切の捜査を完了した上で作成されるものではなく、一應の捜査を了り犯罪の輪廓が明にされた時に記載されるものであるから餘り纏り過ぎたものは却つて不自然である。それだけにまた一脈の新鮮さを伴ふ筈である。従て捜査報告書の犯罪事實としては體裁よく纏つた説明的記述よりは事實に即した經過的記述の方がより自然であると思はれる。

證據の蒐集に付特に報告する必要ある場合、例へば被疑者が贓品の一部をA町B橋西側に棄てたと申立てゝゐるので捜査したが發見出来なかつたと云ふやうなことは洩れなく記載すべきである。總て財産罪に於ては不法に取得した財産、例へば盗んだ時計、横領した金、騙取した軸物等を如何に處分したかを捜査報告書に於て明にして置くのが便宜である。

第十例

竊盜被疑事件報告

本籍 奈良縣生駒郡A村大字B番地不詳
住所 不定

無職

被疑者 山田 吾 一 郎

當 二 十 八 年

右竊盜被疑事件ニ付左記報告候也

昭和十二年八月十七日

A 警察署

司法警察吏巡查 村 瀬 信 夫

A 警察署長

司法警察官警視 大 川 高 敏 殿

記

二、被疑者ノ前科

昭和六年十月頃大阪區裁判所ニ於テ竊盜罪ニヨリ懲役十月ニ

第二章 捜査報告書 第三節 捜査報告書の書方

昭和八年五月頃同裁判所ニ於テ同罪ニヨリ懲役一年六月ニ

昭和十年四月同裁判所ニ於テ同罪ニヨリ懲役二年ニ各處セラレ

昭和十二年四月十八日刑ヲ了ヘテ奈良刑務所ヲ出所シタル旨申立テ居リ

二、被疑者ノ經歷

本籍地ニ於テ尋常五年ヲ中途ニシテ罷メ大阪市東淀川區三國町方面ノ鑄物工場ニ徒弟トシテ雇ハレ約三年ニシテ同家ヲ飛出シタル後大阪市内ノ鑄物工場ヲ轉々シ二十一歳ノ頃自由勞働者ノ群ニ入り竊盜ノ前科ヲ重ヌルニ至リタルモノ

三、捜査ノ端緒經過

昭和十二年八月十六日午前一時頃大阪市港區九條通一丁目先街路ヲ偵邏中同所菓子商上田吉信方軒下ニ跪リ居ル者アルヲ發見シ之ヲ取調ヘタルニ贓品ト認メラルル衣類數點ヲ所持シ居タルニヨリ竊盜被疑者ト認メ署ニ同行シ慎重取調ヘタルトコロ犯行一切ヲ自供シタルモノ

四、犯罪ノ動機

昭和十二年四月十八日奈良刑務所ヲ出所シタル後大阪市築港ニ來リ沖仲仕ヲ爲シ居タルモ自己ノ怠惰ヨリ生活費ニ窮シタル結果本件犯行ヲ重ヌルニ至リタルモノ

五、犯罪事實

被疑者ハ犯意繼續ノ上

(一) 昭和十二年八月十日午前一時頃大阪市A區B町一丁目九十六番地太田鐵工場東側板塀ヲ乘リ越ヘ同工場構内ニ忍入り同工場主太田一男ノ保管ニ係ル三馬力モーター一臺及同人所有ノリヤカー一臺(時價合計約金二百七十圓相當)ヲ竊取シ

(二) 同月十六日午前零時過頃同區C町一丁目二十六番地先街路ヲ通行中同所古着商大野安太郎方表入口ノ戸カ細目ニ開キ居ルヲ認メ之ヲ押開キテ同家店ノ間ニ忍入り家人ノ就寢セラル隙ニ同人所有ノ古着大島紬男物袴、同羽織各一枚金紗女物袴三枚、同單衣五枚及丸帶三本(時價合計約金二百五十圓相當)ヲ竊取シ

タルモノナリ

六、贓品ノ處分

- (一)ノ贓品ハ同月十二日同市A區北海岸通一丁目先ニ於テ折柄通り蒐リタル屑買年齡四十歲位ノ氏名不詳ノ男ニ金四十五圓ニテ買却シ其ノ金ヲ飛田遊廓K樓等ニ於テ遊興ニ費消シ
- (二)ノ贓品ハ檢舉ノ際現ニ所持シ居タルモノ

第一章 公務執行妨害

第一節 總說

第一 加害行爲

一 般公務執行妨害 (第九十五條第一項)

一 公務員の

二 職務を執行するに當り

三 その公務員に對し

四 暴行又は脅迫を加へたること

二 特殊公務執行妨害 (第九十五條第二項)

一 公務員をして

第一章 公務執行妨害

- 二 或處分を爲さしめ若くは爲さざらしむる爲又は其の職を辭せしむる爲
- 三 その公務員に對し
- 四 暴行又は脅迫を加へたること

第二 參考判例

- 一 大正七年大審院判例 公務員カ其ノ權限ニ屬スル事項ニ關シ法令ニ定ムル方式ニ遵據シ其ノ職務ヲ執行スルニ當リ事實ニ付錯誤ヲ生シタル爲方式上ノ要件ヲ充サ、ル場合ト雖モ一應其ノ行爲カ公務員ノ適法ナル行爲トシテ認メラル、以上ハ之ヲ刑法第九十五條第一項ニ所謂公務員ノ職務執行ト爲スニ妨ナキモノトス
- 二 明治四十四年大審院判例 刑法第九十五條第一項ニ公務員ノ職務ヲ執行スルニ當リトアルハ其ノ職務ヲ行フコトカ人ヲ強制スルニ至ルヘキ場合ノミニ限ラス汎ク職務ノ範圍内ニ屬スル事項ヲ行フ場合ヲ包含スルモノトス

第三 書方要領

- 一 本罪は被害者が公務員たるの身分を持たなければならぬ。従て犯罪事實には被害者の公務員たることを具體的に表はさなければならぬ。
- 二 犯行が被害者の職務執行に際して行はれることが必要である。従てその職務の執行を具體的に表はさなければならぬ。
- 三 犯罪の内容は暴行又は脅迫である。暴行の上傷を負はしめた場合は公務執行妨害罪と傷害罪の競合（刑法第五十四條前段）となる。従て傷害の點を單なる傷害罪と同様具體的に表し事件の罪名を「公務執行妨害傷害」としななければならぬ。
- 四 特種公務執行妨害の方は目的犯である。犯行が公務員をして或處分を爲さしめ若くは爲さざらしむる爲又は其の職を辭せしむる爲に爲されることが必要である。従て此の目的を明示しなければならぬ。
尙公務員の意義に付ては刑法第七條參照

第二節 犯罪事實の實例

被害者梅本三太郎ハ昭和十一年五月頃職ヲ失ヒ妻八千代ヲ伴ヒ親族ノ間ヲ轉々シ居リタル處同年八月上旬頃夫婦間ニ離婚問題ヲ生シ八千代ニ於テ其ノ實家タルA縣B郡C村大字D寺井様吉方ニ立戻リタルヨリ八千代ニ會ヒ直接其ノ眞意ヲ確メント同年九月二十日午前一時三十分頃酒氣ヲ帶ヒテ右寺井方ニ到リ大聲ヲ張上ケ八千代ヲ出セト怒鳴リ居タル折柄同村駐在所詰A縣巡查照内淨太カ家人ノ急報ニヨリ其ノ場ニ駆付ケ之ヲ制止シタルモ應セス亞テ同巡查ニ於テ公安ヲ害スルノ虞アル者トシテ檢束セントシ其ノ旨ヲ告クルヤ何ヲツト叫ヒツツ矢庭ニ手拳ヲ以テ數回同巡查ヲ毆打シ其ノ顔面ニ治療日數約一週間ヲ要スル打撲傷ヲ負ハシメ以テ同巡查ノ該公務ノ執行ヲ妨害シタルモノナリ

單に暴行のみなる場合は、「數回同巡查ノ頭部ヲ毆打シ暴行ヲ爲シタルモノナリ」と書く。

第二章 封印、差押標示破棄（第九十六條）

第一節 總 說

第一 加害行爲

- 一 公務員の施したる
- 二 封印又は差押の標示を
- 三 損壊し又は其の他の方法を以て
- 四 無効ならしめたること

第二 参考判例

昭和六年大審院判例 裁判所ノ發シタル假處分命令ニヨリ執達吏ニ於テ該土地ヲ占有シ其ノ土地内ニ立入

第二章 封印、差押標示破棄

リ耕作スルコトヲ禁止シタル標示札アルニ拘ラス之ヲ無視シテ右土地内ニ立入り荒起シト稱スル耕作ヲ爲シタル事實ハ本條ニ所謂其ノ他ノ方法ヲ以テ標示ヲ無効タラシメタル場合ニ該當スルモノトス

第三 書方要領

本罪は民事訴訟法上の、或は税法上の強制執行を妨害することを以て内容とする。従て本罪の被害者は國家である。たゞ強制處分と言へば其の主體が國家であることは明であるから、特に被害者として表示する必要はない。之は國家を被害者とする他の犯罪に於ても同様である。強制執行は定められた法律關係に於て定められた方式に基いて爲される。従て犯罪事實には此の點を明示しなければならぬ。

第二節 犯罪事實の實例

執行物件の差却 (第九十六條)

被疑者田村與一郎ハ豫テ實兄A市B町二百三十一番地米穀商末野與二郎ト自己ノ所持スル末野家相傳ノ品ト傳ヘラルル軸物ノ所有權ニ關シ紛争ヲ生シ居タルトコロ昭和十三年十一月二十六日右末野ヨリ委任ヲ受ケタルA區裁判所執達吏柿崎信隆ヨリA區裁判所昭和十一年(ト)第四號假處分決定正本ニ基キ自己ノ所持スル不動明王ヲ畫キタル古佛畫一點外軸物合計十一點ニ對シ假處分ノ執行ヲ受ケ同物件ハ石油箱中ニ納メラレ之ニ封印ヲ施サレタル上同執達吏ノ占有ニ移サレタル儘同町二十五番地自宅ニ於テ之カ保管ニ任シ居タルカ生活費ニ窮シタル末同十二年四月三日頃不法ニモ右封印ヲ破棄シテ該物件ヲ取出シ之ヲ他ニ賣却シテ同封印ヲ無効ナラシメタルモノナリ

第三章 逃走

第一節 總說

第一 加害行爲の内容

- 一 一般逃走 (第九十七條)
 - 一 既決未決の囚人
 - 二 逃走したること
- 二 特殊逃走 (第九十八條)
 - 一 既決未決の囚人又は勾引狀の執行を受けたる者
 - 二 拘禁場又は械具を損壞し若くは暴行脅迫を爲し又は二人以上通謀して
 - 三 逃走したること

三 拘禁者奪取 (第九十九條)

- 一 法令に因り拘禁せられたる者を
- 二 奪取したること

四 第一種逃走補助 (第一百條第一項)

- 一 法令に因り拘禁せられたる者を
- 二 逃走せしむる目的を以て
- 三 器具を給與し其他逃走を容易ならしむ可き行爲を爲したる者

五 第二種逃走補助 (第一百條第二項)

- 一 法令に因り拘禁せられたる者を
- 二 逃走せしむる目的を以て
- 三 暴行又は脅迫を爲したる者

六 第三種逃走補助 (第一百一條)

- 一 法令に因り拘禁せられたる者を看守又は護送する者
- 二 被拘禁者を
- 三 逃走せしめたること
- 七 以上の未遂（第二百二條）

第二 参 考 判 例

- 一 大正六年大阪區裁判所判例 警察署ニ於テ警察犯處罰令違反ニ依リ拘留三日ノ即決言渡ヲ受ケ拘留中
甲拘留場ヨリ乙拘留場ニ移送ノ途上護送巡查ノ隙ヲ窺ヒ手錠ヲ拔取り逃走シタルハ刑法第九十七條ニ該當
スルモノトス
- 二 大正六年法曹會決議 留置場ナルモノハ監獄法第一條第三項ニ依リ監獄ニ代用シテ一月以上ニ涉ラサ
ル自由刑ノ執行ヲ爲シ得ヘキモノナルヲ以テ留置場ニ於テ拘留刑ノ執行中ニ逃走シタルモノハ逃走罪ヲ構
成シ刑法第九十七條ニ依リ處斷セラルヘキモノトス

第三 書 方 要 領

本罪は總て身分犯である。即ち被疑者は一般逃走に於ては既決未決の囚人であること、特殊逃走に於ては既決未決の囚人又は勾引狀の執行を受けたる者であること、拘禁者奪取第一種、第二種逃走幫助に於ては法令に因り拘禁せられたる者であること、第三種逃走幫助に於ては法令に因り拘禁せられたる者を看守又は護送する者であることが必要である。従て犯罪事實を書くに當つては夫々右被疑者の身分を明示しなければならぬ。

第一種第二種逃走幫助は目的犯である。何れも法令に因り拘禁せられたる者を逃走せしむる目的がなければならぬ。従て犯罪事實を書くにも此の目的を明示しなければならぬ。

第二節 犯罪事實の實例

留置所を破壊して逃走（第九十八條）

被疑者村瀬信三ハ一定ノ住所職業ヲ有セス奈良縣北葛城郡王子町方面ヲ徘徊中昭和十四年一月十四日奈良縣A警察署ニ引致セラレ同警察署長大石三郎ヨリ警察犯處罰令違反ニ依リ拘留二十日ニ處セラレ同日右刑確定シテ同警察署留置場ニ於テ其ノ執行ヲ受ケ居リタルカ同月三十日午後六時頃同日朝手洗場ニ於テ入手シ來リタル海軍ナイフヲ以テ同留置場ノ天井板及屋根ノ一部ヲ破壊シ逃走シタルモノナリ

第四章 犯人藏匿 (第百三條)

第一節 總說

第一 加害行爲

- 一 罰金以上の刑に該る罪を犯したる者又は拘禁中逃走したる者を
 - 二 藏匿し又は隠避せしめたる者
- 尙犯人又は逃走者の親族にして犯人又は逃走者の利益の爲めに本罪を犯したるときは罰せられなし。

第二 参考判例

- 一 大正八年大審院判例 刑法第百三條ニ所謂犯人ヲ藏匿シ又ハ隠避セシムル罪ノ成立ニハ必スシモ該犯人カ逮捕手續中若クハ逮捕ノ爲ノ捜査手續中ニ在ルコトヲ要セサルモノニシテ苟モ當該官カ該犯人ヲ捜査

スルニ當リ情ヲ知り乍ラ之ヲ隠避セシメタル以上ハ同條ノ犯罪ヲ構成スルモノトス

二 昭和五年大審院判例 刑法第三百三條ニ所謂藏匿トハ官憲ノ發見逮捕ヲ免ルヘキ隠匿場ヲ供給スルコトヲ指稱シ隠避トハ藏匿以外ノ方法ニ依リ官憲ノ發見逮捕ヲ免レシムヘキ一切ノ行爲ヲ包含スルモノナルヲ以テ逃避者ニ逃避ノ便宜ヲ與フルカ如キ行爲モ亦同條ノ所謂犯人隠避罪ヲ構成スルモノトス

第三 書 方 要 領

本罪は被疑者が罰金以上の刑に該る罪を犯したる者、又は拘禁中逃走したる者なることを知つて之を藏匿又は隠避したることが必要である。犯罪事實を書くに當つては此の點を特に明ならしめる必要がある。

第二節 犯罪事實の實例

逃走旅費の給與 (第三百三條)

被疑者川添八十八ハ昭和十四年二月十三日午後十時頃大阪市A區B町十八番地自宅ニ曩ニ奈良刑務所ニ於テ受刑中知合ヒタル村瀬信三ノ來訪ヲ受ケ同人ヨリ自分ハ竊盜ヲ爲シ刑事ノ追跡ヲ受ケ居ルニヨリ東京へ逃走スル旅費トシテ金十圓ヲ貸與サレ度キ旨依頼セラルルヤ之ヲ承諾シ即時同人ニ金十圓ヲ給與シテ去ラシメ同十一時頃之ヲ追跡シテ同所ニ到リタルA警察署刑事係巡查山田一夫外一名ニ對シ村瀬信三カ立寄りタル事實ナキ旨申立テ同人ノ逃走ヲ容易ナラシメテ之ヲ隠避シタルモノナリ

第五章 證憑湮滅 (第四百條)

第一節 總說

第一 加害行爲

- 一 他人の刑事被告事件に關する證憑を
- 二 湮滅し又は偽造變造し若くは偽造變造の證憑を使用したる者
尙犯人の親族にして其の利益の爲めに本罪を犯したるときは罰せられない。

第二 參考判例

大正六年大審院判例 刑法第四百條ノ罪ハ將來刑事被告人ト爲リ得ヘキモノニ關スル罪證ヲ湮滅スル場合ニ於テ成立シ得ヘク爾後其者ニ對シテ公訴ノ提起セラルルコトヲ處罰條件ト爲スモノニアラス

第三 書方要領

本罪の犯罪事實を書くに當り特に注意すべきは被疑者に依り毀却又は隱匿された物件が誰に對する何事件の證憑たるべきものかを明にしなければならぬ點である。

第二節 犯罪事實の實例

帳簿の燒却 (第四百條)

被疑者東慶一郎ハ東京市A區B町二丁目二百五十三番地ニ本店ヲ有スル東都製粉株式會社社員ニシテ庶務課長ノ職ニアルモノナルトコロ同會社專務取締役川本順藏ニ對スル背任被疑事件發覺シ昭和十四年四月十七日同人カ警視廳ニ於テ取調ヲ受クルヤ同本店等ニ付搜索ヲ受クルコトノ爲サルヘキヲ豫想シ右事件ノ證憑トナルヘキ物件ヲ發見押收セララルルニ於テハ該事件ニ付右川本順藏ノ不利益ト爲リ且累ヲ會社ノ存立ニ及

サンコトヲ虞レ同日午後十時頃同本店庶務課長室ストーブニテ同會社昭和十二年度及同十三年度支出簿合計四冊及書類二十數點ヲ燒却シ以テ他人ノ刑事被告事件ニ關スル證憑ヲ湮滅シタルモノナリ

第六章 放 火

第一節 總 說

第一 加害行爲

一 第一種放火 (第百八條)

- 一 火を放ちて
- 二 現に人の住居に使用し又は人の現在する建造物、汽車、電車、艦船若くは鑛坑を
- 三 燒燬したること

二 第二種放火 (第百九條第一項)

- 一 火を放ちて
- 二 他人の所有に係る現に人の住居に使用せず又は人の現在せざる建造物艦船若くは鑛坑を

三 焼燬したること

三 第三種放火 (第九條第二項)

一 火を放ちて

二 自己の所有に係る現に人の住居に使用せず又は人の現在せざる建造物艦船若くは鑛坑を

三 焼燬し

四 因て公共の危険を生ぜしめたること

四 第四種放火 (第十條第一項)

一 火を放ちて

二 他人の所有に係る第九條第九條に定めたる以外の物を

三 焼燬し

四 因て公共の危険を生ぜしめたること

五 第五種放火 (第十條第二項)

一 火を放ちて

二 自己の所有に係る第八條第九條に定めたる以外の物を

三 焼燬し

四 因て公共の危険を生ぜしめたること

六 第六種放火 (第十一條第一項)

一 火を放ちて

二 自己の所有に係る現に人の住居に使用せず又は人の現在せざる建造物艦船若くは鑛坑を

三 焼燬し

四 因て第八條又は第九條第一項に記載しある物に

五 延焼したること

七 第七種放火 (第十一條第一項)

一 火を放ちて

- 二 自己の所有に係る第八條第九條に定めたる以外の物を
- 三 焼燬し
- 四 因て第八條又は第九條第一項に記載しある物に
- 五 延焼したること

八 第八種放火 (第百十一條第三項)

- 一 火を放ちて
- 二 自己の所有に係る第八條第九條に定めたる以外の物を
- 三 焼燬し
- 四 因て他人の所有に係る第八條第九條に定めたる以外の物に延焼したること

註 未遂及豫備は第一種、第二種放火に付てのみ認められる——第百十二條第百十三條
自己の所有に係る物と雖も差押を受け物權を負担し又は賃貸し若くは保險に附したる場合は他人の所有に係る物の例により取扱はれる——第百十五條

第二 參考判例

- 一 昭和四年大審院判例、刑法第八條ニ「現ニ人ノ住居ニ使用シ又ハ人ノ現在スル建築物」トアル「人」トハ犯人以外ノ者ヲ指稱スルモノニシテ火ヲ放テ現ニ犯人ノミノ住居ニ使用シ又ハ犯人ノミノ現在スル建築物ヲ燒燬スルモ同條ノ放火罪成立セサルモノトス
- 二 昭和四年同 刑法第八條ノ放火罪ハ他人ノ現ニ住居ニ使用シ又ハ他人ノ現在スル建築物ナルコトヲ認識シテ之ヲ燒燬スルノ意思アルコトヲ必要トス
- 三 昭和六年同 放火罪ノ本質ハ公共的法益ニ屬スル靜謐ヲ害スルノ罪ナルカ故ニ苟モ放火ノ行爲カ一定ノ目的物ノ上ニ行ハレ導火材料ヲ離レ獨立シテ燃燒作用ヲ營ミ得ヘキ状態ニ達シタルトキハ該法益ハ既に侵害セラレタルモノト云フヘク其ノ目的物ヲシテ全然其ノ效用ヲ喪失セシムルニ至ラサルモ法ニ所謂燒燬ノ結果ヲ生シタルモノトス
- 四 大正十五年同 現ニ人ノ住居ニ使用スル建築物ヲ燒燬スル目的ヲ以テ人ノ住居ニ使用セサル建築物ニ放火シ之ヲ燒燬シタルモ目的ノ建物ニ延焼セシムルニ至ラザリシトキハ第八條ノ未遂罪ヲ以テ論スヘキモノ

第三 書 方 要 領

放火犯は所謂動機犯であるから犯罪の動機例へば怨恨、保険金詐欺等を明示しなければならぬ。
燒燬した建物又は燒燬せんとした建物等の大きさその他を具體的に表はさなければならぬ。例へば「間口四間奥行五間木造瓦葺平家建住家一棟」等
全燒した場合は全燒と書き、一部燒燬の場合は其の部位程度を具體的に表はし更に既遂未遂の別を明にしなければならない。

放火は前述の通り第一種より第八種までであるからよく事實を見究めた上其の何れに屬するやを定め構成要件を落さないやうにしなければならない。

第二節 犯罪事實の實例

一 保険金詐欺を目的とする第一種放火同未遂 (第百八條)

被疑者上中直次ハ大工職ナルモ病氣勝ニテ昭和十二年八月ヨリ甲縣乙郡丙町大字丁三千八百五十九番地所在同所橋尾廣夫ノ所有ニ係ル木造トタン葺二階家四戸建長屋ノ東ヨリ二軒目間口二間奥行三間ノ一戸ヲ借り受ケ家族、三名ト共ニ居住シ辛シテ生計ヲ維持シ來リタル處年末トナルニ及ヒ家計益々困難ヲ加フルニ至リ豫テ同自宅ニ在ル自己所有ノ家具什器衣類等ニ對シ日本海上火災保險株式會社ト金千三百圓ノ火災保險契約ヲ締結シアリタルヲ奇貨トシ右自宅ニ放火シ同家屋ト共ニ右被保險物ヲ燒失セシメテ之カ保險金ヲ領得センコトヲ決意シ犯意ヲ繼續シテ
第一 昭和十三年十二月十三日午後九時頃家族等ノ外出セル隙ニ新聞紙ニ炭火一個ヲ包ミ屑物等ヲ入レアル同自宅臺所揚板ノ下ニ挿入シテ放火シタルモ燃上ルニ至ラスシテ自然消火シタル爲所期ノ目的ヲ遂ケス

第二 翌十四日午後九時頃同様同所ニ放火シタルモ同様自然消火シタル爲所期ノ目的ヲ遂ケス

第三 翌十五日午後十時頃家族等ノ就寝セルヲ見届ケタル後自宅階下六疊ノ間押入ヨリ新聞紙等ヲ入レ置キタル柳行李ヲ持出シ之ニ鉋屑等ヲ容レ前記揚板ヲ開キテ同所床下ノ西端ニ差置キ火鉢ノ炭火一個ヲ右柳行李内ニ投入レテ放火シ因テ同四戸建長屋ヲ全焼セシメタルモノナリ

註 保險會社に對し保險金支拂の手續を執れば詐欺の着手があつたことになる。右手續を執る前に發覺するか又は右手續を執ることを斷念した場合は放火だけである。

二 恨をはらさんが爲の第四種放火 (第一百條第一項)

被疑者花田なつハ夫龍之助ノ死亡後昭和三年十一月頃ヨリ龍之助ノ甥木村四郎ト情交關係ヲ續ケ居リタル處右四郎カ昭和八年二月米澤寅三ノ次女そのト結婚同棲スルヤ

遽ニ態度ヲ變シ被疑者ヲ疏外シテ顧ミス言葉モ交ササルニ至リタルヨリ痛ク四郎ノ態度ヲ恨ミ遂ニ火ヲ發シテ以テ鬱憤ヲ霽サンコトヲ決意シ犯意ヲ繼續シテ

第一 昭和八年三月十日午前一時頃長崎縣A郡B町六百二十九番地ナル右四郎方ニ到リ其ノ母家ニ近接スル竈場内西北隅ニ在リタル同人所有ノ杉枯葉約一抱ヲ稍前方ニ搔キ出シ所携ノ燐寸ヲ以テ之ニ放火シ直ニ其ノ場ヲ立出テ四郎夫婦及同人母いくノ就寝シ居リタル右母家西側ニ到リヨイノト聲ヲ發シツツ附近ニ在リタル木槌ヲ以テ數回兩戸ヲ打叩キタル上自宅ニ逃ケ歸リ因テ同杉枯葉ヲ燒燬シ右四郎方竈場母家等ニ延焼スルノ危險ヲ生セシメ

第二 同月十四日午前零時半頃同町五百六十五番地稻田苅吉方薪小屋ニ在リタル同人所有ノ杉枯葉約一抱ヲ持來リ前記四郎方竈場内略々中央ノ箇所ニ差置キタル上所携ノ燐寸ヲ以テ之ニ放火シ直ニ其ノ場ヲ立出テ前回同様ヨイノト聲ヲ發シツツ木槌ヲ以テ四郎方母家西側ノ兩戸ヲ打叩キタル上自宅ニ逃ケ歸リ因テ同杉枯葉ヲ燒燬シ前同様ノ危險ヲ生セシメタルモノナリ

第七章 失火

第一節 總說

第一 加害行為

- 一 第一種失火 (第一百十六條第一項)
 - 一 火を失して
 - 二 第一百八條に定めたる物又は他人の所有に係る第一百九條に定めたる物を
 - 三 燒燬したること
- 二 第二種失火 (第一百十六條第二項)
 - 一 火を失して
 - 二 自己の所有に係る第一百九條に定めたる物又は第一百十條に定めたる物を

- 三 燒燬し
- 四 因て公共の危険を生ぜしめたること

第二書 方要領

本罪は過失犯であるから、何處に被疑者の過失があるかをはつきりと認定し、之を明示しなければならぬ。

第二節 犯罪事實の實例

第一種失火 (第一百十六條第一項)

被疑者大西繁枝ハ夫弋西壽三外家族四名ト共ニ大阪市東淀川區十三西之町一丁目十八番地佐野恭三郎ノ所有ニ係ル同所々在木造瓦葺ニ階建三戸長屋ノ中央間口十三尺奥行二十二尺ノ一戸ニ居住シ居リタルトコロ昭和十二年四月十三日午後六時頃右自宅臺



所竈ニ於テ夕飯ヲ炊キ了リタル後不注意ニモ焚残リノ薪ニ尙火氣ノ残存セルニ氣付カ
 ス之ヲ柴藁屑等散亂セル同竈右側ノ土間ニ放置シタル爲同火氣ヨリ右柴藁屑等ニ燃移
 リ因テ同日午後十時頃右三戸長屋ヲ全燒スルニ至ラシメタルモノナリ

第八章 水利妨害 (第二百二十三條)

第一節 總說

第一 加害行爲

- 一 堤防の決潰水閘の破壊其の他の方法に依り
- 二 水利を妨害したること

第二 参考判例

明治三十二年大審院判例 水利妨害罪ノ成立ニハ水ノ使用ニ付キ他人ノ有スル權利ヲ妨害スルノ事實アルヲ
 必要トス從テ他人カ權利ナクシテ擅ニ水ヲ使用スルニ際リ自己ノ權利ヲ行使シタル結果其使用ヲ妨クルコ
 トアルモ該犯罪ヲ構成スルモノニアラス

昭和四年同 公共ノ水路ヨリ一私人ノ所有地ヲ通過シテ流下スル水ヲ下流ニ於テ慣習上使用スル權利ヲ有スル者アル場合ニ上流地所有者カ故意ニ水路ヲ壅塞シテ流水使用ノ途ヲ杜絶シタルトキハ水利妨害罪ヲ成立ス

昭和七年同 水利妨害罪ノ成立スルニハ被害者ニ於テ契約上又ハ慣習上水ノ使用ニ付權利ヲ有スルコトヲ要シ犯人ノ行爲ニ依リ該權利ノ行使カ妨害セラレタルコトヲ要ス

第三 書 方 要 領

水利妨害罪の成立するには判例にある通り、被害者に於て契約上又は慣習上水の使用に付權利を有すること並犯人の行爲に依り其の權利の行使を妨害せられたることが必要である故に、犯罪事實を記載するにも、先づ被害者に水の使用に付權利を有することを明にし、次に被疑者が其の權利の行使を妨害したことを明にしなければならない。

水利妨害は水喧嘩の末惹起する場合が多い。従て其の経緯が随分多岐に亘るのを常とする。犯罪事實を書くには其の経緯が一應理解出来るやうに心掛けることが必要である。

第二節 犯罪事實の實例

水利妨害 (第百二十三條)

被疑者川上信造、倉田八十八、上山重一ハ孰レモ奈良縣A郡B村大字C地内矢田池南側ニ水田ヲ有シ之ヲ自作シ居リ而シテ同大字地内ノ水田カ水不足ヲ來シタル場合ハ同大字民ノ決議ニヨリ其ノ共同所有ニ係ル送水用石油發動機ヲ使用シテ同池ノ水ヲ揚ケ同大字地内ノ水田ヲ同池及之ヲ東西ニ貫ク里道ニヨリ二分シ午前八時ヲ境ニ南北兩側ヲ一晝夜交代ニ灌漑スル慣習ナルトコロ昭和十二年七月十二日折柄旱天續ニテ同水田ニ水不足ヲ來シタルヨリ同大字民ニ於テ同池ノ水ヲ使用スヘキ決議ヲ爲シ爾來南北兩側ニ於テ同發動機ヲ以テ一晝夜交代ニテ灌漑シ居リタルモ數日ニシテ同池ノ水モ枯渴ニ瀕スルニ及ヒ共謀ノ上北側水田ノ灌漑時タル同月十八日午後十時頃見張人ノ歸宅セル隙ヲ窺ヒ北側水田ノ溝ニ通シテ送水セル同發動機ノ送水管ヲ潜ニ南側水田ノ溝ニ

通シテ引續キ北側水田ノ灌溉時タル翌十九日午前五時頃事發覺スル迄ノ間同池ノ水ヲ以テ專ラ南側水田ニ灌溉シ其ノ間同大字杉田忠外二十數名ノ耕作ニ係ル北側水田ノ灌溉ヲ停止セシメ以テ其ノ水利ヲ妨害シタルモノナリ

第九章 汽車電車往來妨害 (第二百二十五條第一項)

第一節 總 說

第一 加 害 行 爲

- 一 鐵道又は其の標識を損壞し又は其の他の方法を以て
- 二 汽車又は電車の
- 三 往來の危険を生ぜしめたること

第二 參 考 判 例

大正九年大審院判例 刑法第二百二十五條所定ノ往來危險罪ハ實害罪ニ非サルヲ以テ苟モ犯人ノ行爲ニ依リ汽車電車又ハ艦船ヲシテ顛覆脱線衝突若クハ覆没等ノ災害ニ遭遇スヘキ虞アル状態ヲ生セシメタル場合ニ成

立スルモノニシテ具體的ニ實害ノ生シタルコトヲ必要トセサルモノトス

第三 書方要領

汽車電車をして顛覆脱線衝突等の災害に遭遇すべき虞ある状態を生ぜしめた手段を具體的に表すことが本件犯罪事實を書くについての最要點である。

第二節 犯罪事實の實例

汽車往來妨害 (第二百二十五條第一項)

被疑者今田正ハ昭和十四年七月三日午後十一時三十分頃夜遊ヒノ歸途A市B町五十二番地先國營鐵道關西線軌道踏切ニ差蒐ルヤ醉餘惡戯心ヲ起シ同踏切南側ニ建テ在リタル幅約四寸長サ約二尺厚サ約八分ノ板ニ長サ約五尺二寸ノ角材ノ柄ヲ取付ケタル注

意標札ヲ拔取り之ヲ同所軌道ノ南側レール上ニ斜ニ横タヘ以テ同軌道ヲ進行スヘキ汽車ノ往來ニ危險ヲ生セシメタルモノナリ

第十章 過失汽車電車等往來妨害

第一節 總 說

第一 加害行爲

- 一 過失汽車電車等往來妨害 (第二百二十九條第一項)
- 一 過失に因り
- 二 汽車電車又は艦船の
- 三 往來の危険を生ぜしめ又は汽車電車の顛覆若くは破壊又は艦船の覆没若くは破壊を致したること
- 二 業務上過失汽車電車等往來妨害 (第二百二十九條第二項)

- 一 汽車電車又は艦船の往來の業務に従事する者
- 二 過失に因り
- 三 汽車電車又は艦船の
- 四 往來の危険を生ぜしめ又は汽車電車の顛覆若くは破壊又は艦船の覆没若くは破壊を致したること

第二 參考判例

人ノ現在スル汽車又ハ電車ヲ破壊シタル者トハ人ノ現在スル汽車又ハ電車ノ實質ヲ害シテ其交通機關タル用法ノ全部又ハ一部ヲ不能ナラシムヘキ程度ノ損壞ヲ致シタル者ヲ指稱ス

第三 書方要領

過失犯であるから被疑者の過失を犯罪事實の中に浮出させなければならぬ。汽車電車等の何處かを幾らかでも破壊しさえすれば直に破壊罪になるのではない。危険罪か破壊

罪かは前掲の判例に基き判断しなければならぬ。

刑法第二百二十九條第二項に其の業務に従事する者と云ふのは汽車電車又は艦船の往來の業務に従事する者の謂である。之等の業務に従事する者が夫々自己の業務に關する汽車電車又は艦船の往來の危険を生ぜしめ或は破壊等を致したる場合本項の適用がある。故に自動車の運轉者が過ちて運轉中の自動車を電車に突當て、其の往來に危険を生ぜしめたと云ふ場合は第二項ではなくて第一項である。

第二節 犯罪事實の實例

業務上過失電車往來妨害 (第二百二十九條第二項)

被疑者原田清太郎ハA電鐵株式會社電車運轉手トシテ勤務中昭和十二年五月七日午後四時頃同會社北大阪線野田發天神橋筋六丁目行第六十一號電車ニ車掌二名乘客二十

數名ヲ乗車セシメテ運轉シ大阪市西淀川區浦江北町四丁目停留所ヲ發車スルニ當リ甲野三郎カ鐵材ヲ滿載シタル荷馬車ヲ轆キテ東側ヨリ約十米前方軌道内ニ入り來り西側ニ横斷セントシタルモ積荷後端カ僅ニ軌道上ニ掛リタル儘轆馬カ停止シテ動カス同人ニ於テ苦心シ居ルヲ認メナカラ不注意ニモ荷馬車ハ直ニ軌道ヲ通過スヘシト輕信シ漫然發車進行シタル爲該荷馬車ノ約二米手前ニ於テ初メテ危険ヲ感シ急停車ノ處置ヲ執リタルモ及ハス電車運轉臺右側ヲ該荷馬車ノ積荷後端ニ突當テ因テ同電車ノ往來ニ危険ヲ生セシメタルモノナリ

第十一章 住居侵入 (第三百三十條)

第一節 總說

第一 加害行爲

- 一 故なく
- 二 人の住居又は人の看守する邸宅建造物若くは艦船に
- 三 侵入し又は要求を受けて其の場所より退去せざること

第二 參考判例

昭和七年大審院判例 刑法第三百三十條ニ所謂邸宅トハ人ノ住居ノ用ニ供セラル、家屋ニ附屬シ主トシテ住居者ノ利用ニ供セラルヘキ區劃セル場所ヲ謂フ

昭和五年同 刑法第三百三十條ニ故ナクトハ正當ノ理由ナクノ意義ニ外ナラサルヲ以テ縱令債權督促ノ爲債務者ノ家人ニ面會ヲ求ムル場合ト雖モ家人之ニ應セサルトキハ他ニ適法ノ手段ヲ以テ債務者本人ニ對シ督促ヲ爲スハ格別家人ノ承諾ナキニ拘ラス住居ニ侵入シテ面會ヲ強要スヘカラサルモノトス

大正十五年同 退去ヲ要求シ得ヘキモノハ住居權利者タル住居者若ハ看守者本人ニ限ラス家族其他ノ者ト雖モ本人ノ爲ニ代リテ住居權ヲ行使スルコトヲ認容セラレタリト推測スヘキ場合ニ於テハ退去ヲ要求シ得ヘキモノトス

第三 書方要領

本罪の成立には故なく換言すれば正當の理由なく人の住居又は人の看守する邸宅等に侵入することが必要である。之を書き表す場合「故ナク」と書いて仕舞ふのも一方法であり内容として十分であるが餘りに抽象的な嫌ひがある。それで積極的に正當な理由として認容し得ざる侵入の目的を書き表はした方がより丁寧であり犯罪の経緯を理解せしめる所以ではないかと思ふ。例へば「竊

盗ノ目的ヲ以テ」又は俗に夜這ひと言ふやうな場合であれば「劣情ニ駆ラレ悪戯ノ目的ヲ以テ」と書けば「故ナク」と云ふ住居侵入罪の構成要件を具體的に表はすことになる。
住居侵入の場合は別に問題ないとして邸宅侵入の場合は邸宅の模様を具體的に書き表す必要がある。

第二節 犯罪事實の實例

一 俗に夜這ひ (第三百三十條)

被疑者中田市太郎ハ昭和十二年八月十二日午前零時二十分頃夜遊ヒヨリノ歸途A市B町十二番地小出良雄方前ニ差蒐リタル際開放シ在リタル同家表小窓ヨリ同人妻ノブ當三十八年カ奥六疊ノ間ニ獨リ就寢シ居ルヲ認メ劣情ニ駆ラレ悪戯ノ目的ヲ以テ施錠ナキ表入口ヨリ同家屋内ニ侵入シ該六疊ノ間ニ到リタルモノナリ

二 要求を受けて退去せず (第三百三十條)

被疑者木村市郎ハ昭和十四年三月十二日午後三時頃酒氣ヲ帯ヒ奈良縣高市郡A村大字B堤朝吉方表門ヨリ其ノ邸内ニ入り折柄母家前ニテ草花ノ手入ヲ爲シ居タル同人ヲ同人ノ發起ニ係ル頼母子講ノコトニ付難詰シ大聲ニテ怒鳴リ立テ同人ヨリ退去ヲ要求セラレタルモ之ニ應セス約一時間ニ亘リ該邸内ニ止リタルモノナリ

第十二章 通貨偽造

第一節 總 說

第一 加害行爲

- 一 通貨の偽造變造 (第四百四十八條第一項)
- 一 行使の目的を以て
- 二 通用の貨幣紙幣又は銀行券を
- 三 偽造又は變造したること
- 二 偽造變造通貨の行使交付輸入 (第四百四十八條第二項)
- 一 偽造變造の貨幣紙幣又は銀行券を

- 二 行使し又は行使の目的を以て人に交付し若くは輸入したること
- 三 偽造變造通貨の收得 (第五百十條)
- 一 行使の目的を以て
- 二 偽造變造の貨幣紙幣又は銀行券を
- 三 收得したること

第二 參考判例

明治四十三年大審院判例 刑法第四百四十八條第二項ニ行使ノ目的ヲ以テ之ヲ人ニ交付シトアルハ偽貨ヲ流通ニ置ク意思ヲ以テ他人ニ交付スルノ謂ナリ

昭和二年同 紙幣又ハ銀行券偽造ノ罪ノ成立ニハ苟クモ人ヲシテ偽造ノ紙幣又ハ銀行券ヲ眞正ナリト信セシムヘキ程度ノモノタルヲ以テ足り必スシモ其ノ紙質寸法文字地紋ノ模様色彩印章記號ノ實際ニ流通スルモノト同一又ハ類似ノモノタルヲ要セス

昭和七年同 偽造變造ニ係ル通貨ヲ真正ノ通貨トシテ其ノ用法ニ從ヒ使用スルトキハ其ノ行爲ハ眞貨ニ對スル公ノ信用ヲ害スヘキヲ以テ刑法第四百四十八條第二項ニ規定セル偽造變造ノ通貨行使罪ヲ構成スヘク其ノ結果犯人ニ於テ之レカ對價ヲ得タルト否トハ同罪ノ構成ニ影響ナキモノトス

第三 書方要領

第四百四十八條第一項、第五百十條等は目的犯であるから犯罪事實を書くに目的を落してはならぬ。
S.
通貨の偽造變造には特殊の技術を要する。従て偽造又は變造の方法を簡單に記載する必要があ

第二節 犯罪事實の實例

一 銀貨白銅貨の偽造行使 (第四百四十八條)

被疑者山崎稔ハ昭和十年十月頃ヨリ失職シ妻及子供四人ヲ抱ヘ生活ニ窮シタル結果鑄物工ノ經驗ヲ有スルヲ奇貨トシ通貨ヲ偽造シテ之ヲ行使セシコトヲ企テ同年十一月初旬ヨリ昭和十一年三月十八日頃迄ノ間約九回ニ亙リ大阪府A郡B町大字Cノ居室ニ於テ自己所有ノ鑄物用具ヲ使用シ五十錢銀貨及十錢白銅貨ヲ原型トシテ土ニテ鑄型ヲ作り亞鉛ヲ熔解シテ右鑄型ニ流シ込ミ巧ニ細工ヲ施シ通用ノ五十錢銀貨約百七十枚及同十錢白銅貨約二十枚ヲ偽造シ昭和十年十一月十日頃ヨリ昭和十一年三月二十五日迄ノ間前後九十三回ニ亙リ奈良縣A郡B村大字C煙草小賣商草原鶴松外九十二名方ニ於テ同人外九十二名ニ對スル煙草菓子等ノ購入代金トシテ右偽造ニ係ル五十錢ノ偽造貨幣合計約八十四枚及同十錢ノ偽造貨幣合計約十枚ヲ使用シ之ヲ行使シタルモノナリ

二 日本銀行兌換券の偽造交付取得 (第四百四十八條第五百十條)

第一 被疑者高村傳五郎市村政太郎ハ孰レモ大阪市内ノ印刷工場ヲ職工トシテ轉々シ居リタルモノニシテ互ニ親交アルモノナルトコロ共謀ノ上通用ノ日本銀行兌換券ヲ偽造シテ之ヲ行使センコトヲ企テ昭和十年十二月中旬頃被疑者高村傳五郎ニ於テ曩ニ職工トシテ雇ハレ居タル同市西區H町二番地株式會社有吉製版所ヨリ小型石版印刷機同附屬品ヲ借受ケ印刷用インキ鳥ノ子紙等ヲ購入シ同十一年一月十日頃ヨリ同月二十八日迄ノ間同區C町五丁目三十二番地被疑者市村政太郎方ニ於テ被疑者兩名互ニ協力シテ右機械材料ヲ使用シ石版印刷ノ方法ニ依リ金拾圓ノ日本銀行兌換券合計五百六十九枚ヲ偽造シ

第二 被疑者市村政太郎ハ同月二十五日前記自宅ニ於テ豫テ親交アル被疑者杉田良太郎ニ對シ前記偽造ニ係ル日本銀行兌換券二十枚ヲ其ノ情ヲ告ケ金二十圓ニテ賣付ケ行使ノ目的ヲ以テ同人ニ交付シ

第三 被疑者杉田良太郎ハ前記第二記載ノ如ク被疑者市村政太郎ヨリ同人等ノ偽造ニ係ル金拾圓ノ日本銀行兌換券二十枚ヲ行使ノ目的ヲ以テ收得シタルモノナリ

第十三章 公文書偽造

第一節 總 說

第一 加 害 行 爲

一 第一種公文書偽造 (第百五十五條第一項)

一 行使の目的を以て

二 公務所又は公務員の印章若くは署名を使用し、或は偽造したる公務所又は公務員の印章若くは署名を使用して

三 公務所又は公務員の作るべき

四 文書若くは圖畫を

五 偽造したること

二 第一種公文書變造 (第百五十五條第二項)

- 一 行使の目的を以て
- 二 公務所又は公務員の
- 三 捺印若しくは署名したる
- 四 文書若しくは圖畫を
- 五 變造したること

三 第二種公文書偽造 (第百五十五條第三項前段)

- 一 行使の目的を以て
- 二 公務所又は公務員の真正なる若しくは偽造したる印章又は署名を使用せずして
- 三 公務所又は公務員の作るべき
- 四 文書又は圖畫を
- 五 偽造したること

四 第二種公文書變造 (第百五十五條第三項後段)

- 一 行使の目的を以て
- 二 捺印又は署名を爲さずして
- 三 公務所又は公務員の作りたる
- 四 文書若しくは圖畫を
- 五 變造したること

註 以上二乃至四ノ公文書偽造變造ニ付條文上行使ノ目的ヲ必要トスルヤ否ヤ疑義アルモ解釋上必要ナリト解ス

五 公務員管掌文書偽造變造 (第百五十六條)

- 一 行使の目的を以て
- 二 公務員が
- 三 其の職務に關し

- 四 虚偽の文書若くは圖畫を作り又は變造したること
- 六 公正證書原本不實記載 (第百五十七條第一項)
 - 一 公務員に對し
 - 二 虚偽の申立を爲し
 - 三 權利義務に關する公正證書の原本に
 - 四 不實の記載を爲さしめたること
- 七 免狀等不實記載 (第百五十七條第二項)
 - 一 公務員に對し
 - 二 虚偽の申立を爲し
 - 三 免狀鑑札又は旅券に
 - 四 不實の記載を爲さしめたること
- 八 偽造變造公文書行使 (第百五十八條)

- 一 以上一乃至七の偽造變造文書を
- 二 行使したること

第二 參考判例

大正五年大審院判例 公務員ノ印章トハ必スシモ其ノ職印ノミヲ限定スヘキモノニアラス公務上使用スル總テノ印章ヲ包含スルモノト解ス

大正四年同 署名トハ必スシモ自署ノミニ限ルヘキニアラス記名ナルト自署ナルトヲ問ハス苟モ作成者ノ如何ナル者ナルカヲ表示スルモノハ悉ク署名ト解ス

大正三年同 文書偽造罪ハ他人ノ作成名義ヲ詐ハリ新ニ文書ヲ作成シタル場合ノミ成立スルモノニアラス假令既存正當ノ文書ヲ變更スル場合ト雖モ作成名義若クハ其ノ他重要ナル點ヲ變更シ爲ニ變更前ノ文書ト全然別個獨立ナル一ノ新ナル文書ト爲ストキハ文書ノ偽造ニシテ變造ニアラス何トナレハ文書ノ效用ハ其ノ證明力ニ在リ而シテ新ナル文書ヲ作出スルハ即チ別異ナル證明力ヲ具有スル文書ヲ作成スルニ外ナラサレハナリ從テ偽造變造ノ區別ハ必スシモ文書ノ性質ヲ變更スルト否トノミニ依ルモノニアラス要ハ變更シテ

新ナル文書ト爲シタルヤ否ヤニアリ

昭和二年同 縦令申立事項又ハ記載事項ノ内容ニ虚偽若ハ不實ナシトスルモ公務員ニ對シ他人ノ代理人ナリト冒稱シテ一定ノ事項ヲ申立テ因テ權利義務ニ關スル公正證書ノ原本ニ右他人ノ申立ニ係ルモノトシテ一定ノ事項ヲ記載セシメタルトキハ刑法第五十七條第一項ノ犯罪ヲ構成スルモノトス

大正十一年同 刑法第五十七條第一項ノ權利義務ニ關スル公正證書トハ公務員カ其ノ職務上作成スル文書ニシテ權利義務ニ關スル或事實ヲ證明スル效力ヲ有スルモノヲ謂フ

大正二年同 偽造文書ノ行使ハ犯人カ之ヲ相手方ヲシテ認識スルコトヲ得セシムヘキ状態ニ置クコトヲ要ス
大正十一年同 登記簿ハ登記ニ付利害關係ヲ有スル者ノ閱覽ニ供スル爲之ヲ登記所ニ備ヘ置クモノナレハ其ノ文書ノ行使ハ其ノ備付ケニ依リ右特殊關係人ノ閱覽シ得ヘキ状態ニ置クヲ以テ足り固ヨリ特定人ノ閱覽スルコトヲ要スルモノニ非ス

第三節 書方要領

一乃至四の公文書偽造變造は目的犯であるから其の目的を缺いてはならない。

冒用したる公務所又は公務員の名義及偽造變造文書の種類内容を明示することが必要である。
偽造變造の方法つまり如何なる紙如何なる印を使用したか其の出所等を簡単に記載しなければならぬ。

行使の場合は其の態様つまりAに交付して行使したとかB登記所に備へ付けしめて行使したとかを明にする。

第二節 犯罪事實の實例

一 縣稅受領證の偽造と同行使 (第五百五十五條第一項、第五百五十八條)

被疑者田中久ハ昭和十二年二月頃ヨリ失職シ生活ニ窮シタル末嘗テA縣B郡C町財務出張所ニ雇トシテ奉職シタルコトアリ徵稅事務ニ通シ居ルヲ奇貨トシ縣稅滯納者ヨリ徵稅名下ニ金員ヲ騙取センコトヲ企テ

- 第一 昭和十二年八月二十七日午後二時頃右C町財務出張所ニ到リ同所員等ト雑談中同財務出張所長ノ保管ニ係ル滞納金徴収用紙約五十枚ヲ竊取シ
- 第二 同月二十八日午前十時頃豫メ前記財務出張所ニ於テ帳簿ヲ一覽シ縣稅ヲ滞納シ居ルコトヲ調ヘ置キタルA縣B郡N町福澤幸吉方ニ到リ同人ニ對シ自分ハ財務出張所員ナルカ滞納縣稅ノ納付アリタキ旨申向ケ行使ノ目的ヲ以テ其ノ場ニ於テ曩ニ竊取シタル前記滞納金徴収用紙ヲ用ヒ各領收金額其ノ他ノ所要事項ヲ記入シ且ツ擅ニA縣出納吏ノ職名ヲ肩書トシテ船橋實ナル名義ヲ冒署シ其ノ名下ニ有合印ヲ押捺シ以テ公務員ノ作成スヘキ滞納金ヲ領收セル旨ノ書類一通ヲ偽造シ即時同所ニ於テ眞正ナルモノトシテ右福澤幸吉ニ交付行使シテ欺キ因テ同人ヨリ即時徵稅名下ニ金七十七圓八十六錢ノ交付ヲ受ケテ之ヲ騙取シ
- 第三 同月二十九日午前十一時頃前同様A縣B郡N村木島義三郎方ニ到リ同人ニ對シ

前同様自分ハ財務出張所員ナルカ滞納縣稅ノ納付アリ度キ旨申向ケ徵稅名義ノ下ニ金員ノ交付ヲ求メテ騙取セントシタルモ同人ニ於テ之ニ應セサリシ爲其ノ目的ヲ遂ケサリシモノナリ

二 保管物品受領證の變造と同行使 (第一百五十五條第二項、第一百五十八條)

被疑者秋山有三ハ昭和十一年五月七日東京市下谷區上野公園ニ於テ象牙製印鑑一箇在中ノ革製蓋口一箇ヲ拾得シ直ニ之ヲ下谷警察署ニ届出テ同署遺失物取扱主任官タル警視廳警視戸田良介ヨリ同人ノ記名捺印アル同人作成名義被疑者宛ノ革製蓋口及印類各一箇ヲ領得セル旨ノ記載アル保管物品受領證書一通ノ交付ヲ受ケ保管中同年八月二十五日同市淺草區A町二十五番地自宅ニ於テ行使ノ目的ヲ以テ擅ニ右保管物品受領證書ノ品名欄中革製蓋口一箇ナル記載ノ次ニ金百圓也ト記入シ右證書ヲ變造シタル上之

ヲ同日同所ニ於テ同町三百十二番地原田登ニ交付行使シタルモノナリ

三 公正證書原本不實記載同行使 (第百五十七條第一項、第百五十八條)

被疑者川村義治ハ株式會社土豫銀行其ノ他ニ合計金三千餘圓ノ負債ヲ有シ居リ債權者ヨリ自己ノ所有財産ニ付差押等ノ處分アルヘキヲ豫想シ之ヲ免ルル爲昭和十年六月十七日高知縣A郡B町自宅ニ於テ昭和十年六月十日同町田宮榮治ヨリ金千五百圓ヲ借受クル旨ノ虚偽ノ金員借用證書ヲ作成シタル上同日B區裁判所登記官吏ニ對シ右債權ノ擔保トシテ自己所有ノ同縣同郡C村大字D三千百二十五番地ノ四山林四反歩外山林合計二十一筆ニ抵當權ヲ設定シタル旨ノ虚偽ノ登記申請ヲ爲シ同登記官吏ヲシテ同裁判所備付ノ登記簿原本ニ其ノ旨不實ノ記載ヲ爲サシメ之ヲ同裁判所ニ備付ケシメテ行使シタルモノナリ

第十四章 私文書偽造

第一節 總 說

第一 加害行爲

一 第一種私文書偽造 (第百五十九條第一項)

- 一 行使の目的を以て
- 二 他人の印章若くは署名を使用し或は偽造したる他人の印章若くは署名を使用して
- 三 其の他人名義の
- 四 權利義務又は事實證明に關する
- 五 文書若くは圖畫を
- 六 偽造したること

二 第一種私文書變造 (第百五十九條第二項)

- 一 行使の目的を以て
- 二 他人の印章を押捺し若くは他人の署名したる
- 三 權利義務又は事實證明に關する
- 四 文書若くは圖畫を
- 五 變造したること

三 第二種私文書偽造 (第百五十九條第三項前段)

- 一 行使の目的を以て
- 二 他人の眞正なる又は偽造したる印章若くは署名を使用せずして
- 三 他人名義の
- 四 權利義務又は事實證明に關する
- 五 文書若くは圖畫を

六 偽造したること

四 第二種私文書變造 (第百五十九條第三項後段)

- 一 行使の目的を以て
- 二 他人の捺印若くは署名なき
- 三 他人名義の
- 四 權利義務又は事實證明に關する
- 五 文書若くは圖畫を
- 六 變造したること

五 診斷書等虛偽記載 (第百六十條)

- 一 醫師が
- 二 公務所に提出すべき
- 三 診斷書檢案書又は死亡證書に

- 四 虚偽の記載を爲したること
- 六 偽造變造私文書行使 (第六十一條)
 - 一 第一百五十九條第六十條所定の
 - 二 文書又は圖畫を
 - 三 行使したること

第二 參考判例

明治四十四年大審院判例 文書トハ文字若ハ之ニ代ルヘキ符號ヲ用キ永續スヘキ状態ニ於テ或物體ノ上ニ記載シタル意思表示ヲ指稱ス而シテ其ノ物體ノ種類ニ付テハ法律上何等ノ制限ナシ

明治四十四年同 文書ノ偽造トハ他人ノ作成名義ヲ偽リ新ニ文書ヲ作成スルコトヲ指稱シ其ノ文書カ何人ノ作成名義ニ係ルヤハ該書面自體ニ依リテ之ヲ判斷シ得ルコトヲ要ス

大正二年同 刑法第一百九條第一項ニ所謂他人ノ署名トハ作成者ノ誰タルカヲ示スニ足ルヘキ記名ノ謂ニシテ其ノ氏名ノ自署ノミニ限ルモノニ非サルヲ以テ苟モ作成者タル他人ノ記名ヲ使用シテ文書ヲ偽造スルニ

於テハ其ノ記名カ本人ノ氏名ヲ顯スモノナルト其ノ通稱若ハ商號ヲ顯ハスモノナルトヲ問ハス又本人ノ自筆タルト他人ヲシテ代筆セシメタルト若ハ印刷ニ依リ表示シタルトニ論ナク該條項ノ文書偽造罪ヲ構成スルモノトス

大正二年同 借用證書ニ保證人トシテ署名スルハ證書記載ノ債務ニ對シテ辨濟ヲ擔保スル意思表示ヲ爲スモノナレハ證書中ニ保證債務ノ内容ヲ明示セサルモ保證證書タルニ妨ナシ故ニ借用證書ニ保證人トシテ他人ノ署名ヲ偽造スルハ保證證書ノ偽造ニシテ署名ノ偽造ニ非ス

大正六年同 苟モ實在セル他人ノ氏名ヲ冒用シ文書ヲ作成シタル以上ハ其ノ検査役タル資格ノ虚無ナルト否トヲ問ハス文書偽造罪ノ構成要件ヲ具備スルモノトス

大正六年同 刑法第六十條ニ所謂醫師ノ診斷書トハ醫師カ診察ノ結果ニ關スル判斷ヲ表示シテ人ノ健康上ノ状態ヲ證明スル爲メニ作成スル文書ヲ指スモノニシテ傳染病豫防法第三條ノ規定ニ依リ醫師カ傳染病患者ヲ診斷シタルコトアル旨ノ届出ヲ爲ス爲メニ作成スル届書ノ如モノヲ包含スルモノニ非ス

大正五年同 刑法第六十條ニ所謂公務所ニ提出スヘキ診斷書ハ醫師ニ於テ自ラ提出スルモノナルト否トヲ論セス汎ク公務所ニ提出セラルヘキ診斷書ヲ包含スルモノトス

大正十二年同 醫師ガ樹上ヨリ墜落死亡シタル者ニ付公務所ニ提出スヘキ死亡證書ヲ作成スルニ際リ故意ニ此ノ原因ヲ記載セス單ニ其ノ者カ腦溢血ニ因リ死亡シタル旨ヲ記載シタルトキハ刑法第六條ノ罪ヲ構成ス

第三 書方要領

虚無人即ち實在しないものゝ作成名義たる私文書を偽造しても私文書偽造罪は構成しない。必ず實在する人の作成名義を詐ることが必要である。従て犯罪事實には特に詐られた作成名義者の氏名を明にしなければならぬ。

被疑者が奈良市紀寺町二番地田中義次郎の氏名を冒用して私文書を偽造せんとし誤つて偽造文書に田中義治郎と書いた場合客觀的に田中義次郎の作成名義であることが明である以上次と治に相違があつても私文書偽造罪は構成する。斯る場合は「田中義治郎ト署シテ田中義次郎ノ氏名ヲ冒用シ」と云ふ具合に其の關係を明にしなければならぬ。

其の他公文書偽造の項で述べたところは全體茲でも通用する。

第二節 犯罪事實の實例

一 保證契約書(私文書)及印鑑證明書(公文書)の偽造行使詐欺

(第百五十五條第一項、第百五十九條第一項、第百五十八條、第百六十一條、第二百四十六條)

被疑者勝野捨松ハ長野市A町一丁目ニ於テ洋品店ヲ營ミ居ル者ナル處、營業資金ニ窮シタル結果親族ナル同市B町米穀商只野捨次郎カ相當ノ資産信用アルヲ奇貨トシ同人名義ノ保證契約書ヲ偽造シ同町金貸業丹野留七ヨリ借用名下ニ金錢ヲ騙取センコトヲ企テ昭和八年十一月七日右丹野留七ヨリ右只野捨次郎ノ保證ニテ金五百圓ノ借用方内諾ヲ得タル後

第一 同月十日右自宅ニ於テ自己ヲ借用人トスル右留七宛金五百圓ノ同日附借用證書

ヲ作成シタル上之ニ擅ニ右只野捨次郎ノ氏名ヲ保證人ナル肩書ヲ附シテ署シ其ノ名下ニ豫メ同市C町刻印業青雲堂事中原泰助ニ依頼シテ作成シ置キタル「只野捨次郎」ナル印類ヲ押捺シテ同人名義ノ保證契約書一通ヲ偽造シ

第二 同日同所ニ於テ行使ノ目的ヲ以テ擅ニ豫テ入手シアリタル印鑑證明書用紙前記「只野捨次郎」ナル印類及前同様中原泰助ニ依頼シテ作成シ置キタル「長野市長之印」ナル印類ヲ使用シテ長野市長名義同月八日附右捨次郎ノ印鑑證明書一通ヲ偽造シ

第三 同月十二日前記丹野留七方ニ到リ右偽造保證契約書及印鑑證明書ヲ真正ナルモノ、如ク装ヒテ同人ニ交付行使シ因テ同人ヲ欺キ借用名下ニ金四百二十圓ノ交付ヲ受ケテ之ヲ騙取シタルモノナリ

二 當座預金受取證の偽造行使 (第百五十九條第一項、第百六十一條)

被疑者大川常吉ハ

第一 昭和八年九月十七日東京市淺草區K町百二十七番地氷卸商桑名清一方奥六疊ノ間ニ於テ長火鉢引出内ニ在リタル桑名清一名義預金額九百十圓株式會社Y銀行淺草支店預金通帳一冊竝右桑名清一所有ノ桑名ト刻セル黒水牛角形印一個(價額約金二圓相當)ヲ竊取シ

第二 同月十八日午前九時頃同區M町二百十七番地前記Y銀行淺草支店ニ於テ行使ノ目的ヲ以テ特別當座預金受取證用紙ニ六百圓ト記入シ擅ニ桑名清一ノ氏名ヲ署シ其ノ名下ニ前記認印ヲ押捺シテ同人名義ノ當座預金受取證一通ヲ偽造シ之ヲ預金通帳ト共ニ同銀行係員ニ提出行使シタルモノナリ

三 診査報告書變造行使詐欺未遂

(第百五十九條第二項、第百六十一條、第二百四十六條、第二百五十條)

被疑者上田忠次郎ハ東京市麴町區有樂町A生命保險株式會社ニ外務員トシテ雇ハレ千葉市千葉百五十六番地同會社千葉出張所ニ勤務中昭和十年七月上旬頃中風症ニテ病臥中ノ從兄長野縣A郡B村三十五番地宇野恒夫當五十二年カ遠カラス死亡スヘキヲ看取スルヤ前記A生命保險株式會社ヲ欺罔シ右恒夫ヲ被保險者トシテ生命保險契約ヲ締結セシメ以テ恒夫ノ遺族ヲシテ不法ニ右保險金ヲ得セシメンコトヲ企テ同月二十九日頃同會社囑託醫相田長良ニ對シ右宇野恒夫長男眞太郎當二十八年ヲ宇野恒夫ナリト欺キテ診斷セシメ同醫師ヨリ同醫師カ記名捺印シテ作成シタル宇野恒夫名ノ診查報告書一通ヲ徴シタル上行使ノ目的ヲ以テ擅ニ其ノ頃右出張所ニ於テ右診查報告書ニ恒夫ノ年齢トシテ當二十八年ト記載シアルヲ當五十二年ト改竄變造シ恰モ同醫師ガ右恒夫本人ヲ診斷ノ上作成シタル診查報告書ナルカ如ク裝ヒ同年八月五日之ヲ宇野恒夫ノ保險契約申込書ト共ニ同會社本店ニ提出行使シ以テ同本店ノ係員ヲ欺キ宇野恒夫ヲ被保險者

竝契約者トスル十年掛保險金五千圓普通養老保險契約ヲ締結セシメ保險證券ノ交付ヲ受ケタル後昭和十一年三月十一日宇野恒夫死亡スルヤ同月二十日恒夫妻宇野みつヲシテ前記會社本店ニ對シ當該保險金ノ請求ヲ爲サシメタルモ事發覺シテ金員騙取ノ目的ヲ遂ケサリシモノナリ

第十五章 有價證券偽造

第一節 總 說

第一 加害行為

- 一 有價證券偽造 (第六十二條第一項)
 - 一 行使の目的を以て
 - 二 有價證券を
 - 三 偽造したること
- 二 有價證券變造 (第六十二條第一項)
 - 一 行使の目的を以て

二 有價證券を

三 變造したること

三 有價證券虛偽記入 (第六十二條第二項)

一 行使の目的を以て

二 有價證券に

三 虚偽の記入を爲したること

四 不正有價證券行使交付輸入 (第六十三條)

一 偽造變造又は虚偽記入を爲したる有價證券を

二 行使し又は行使の目的を以て人に交付し若くは輸入したること

第二 參考判例

昭和六年大審院判例 有價證券トハ證券上表示セラレタル權利ノ行使ニ付其ノ證券ノ占有ヲ必要トスルモノ
ヲ指稱ス

大正十四年同 有價證券虛偽記入ノ罪ハ他人ニ對シ眞正ノ記入トシテ其ノ效用ヲ充タス目的ヲ以テ有價證券ニ虛偽ノ記入ヲ爲スニ因リ成立ス

大正十五年同 有價證券虛偽記入罪ハ單ニ既成ノ有價證券ニ對シ虛偽ノ記入ヲ爲ス場合ニノミ成立スルモノニ非スシテ新ニ有價證券ヲ作成スル者ハ其ノ現ニ作成スル有價證券ニ故意ヲ以テ不實ノ事項ヲ記入スル場合ニ於テモ成立スルモノトス

第三 書方要領

「行使ノ目的ヲ以テ」を落さないこと、有價證券の種類を明示すること、偽造變造の方法を簡明に表はすこと等に就き注意すべきである。

第二節 犯罪事實の實例

一 約束手形の偽造 (第六十二條第一項)

被疑者新井角太郎ハ千葉市A町七百五番地ニ於テ小間物商ヲ營ミ居ルモノナル處年

末大賣出ヲ控ヘ營業資金ニ窮シタル結果約束手形ヲ偽造シ其ノ割引名下ニ金員ヲ騙取センコトヲ企テ行使ノ目的ヲ以テ昭和十一年十二月二日右自宅ニ於テ豫テ入手シ在リタル約束手形用紙ニ金額一千二百圓振出地東京市日本橋區A町二丁目三百七十一番地支拂期日昭和十二年二月十五日支拂地千葉市支拂場所株式會社第九十八銀行千葉支店取受人新井角太郎ト記載シ振出人トシテ擅ニ茂木長兵衛名ヲ署シ其ノ名下ニ有合印ヲ押捺シ以テ茂木長兵衛振出名義ノ約束手形一通ヲ偽造シタルモ金員騙取ノ機ヲ得ス其ノ儘所持シ居タルモノナリ

二 爲替手形虛偽記入同行使詐欺

(第六十二條第二項、第六十三條、第二百四十六條)

被疑者若村太郎ハ相當ノ資産ヲ有シ大正二年頃ヨリ横濱市ニ於テ鐘詰製造業ヲ營ミ居リタルトコロ大正十二年關東大震災ノ影響ヲ受ケテ十數萬圓ノ損害ヲ蒙リ經營困難

ト爲リタルヨリ昭和二年九月二十六日同市A町五百五十番地ニ合資會社若村商店ヲ設立シテ其ノ代表社員トナリ同業ヲ繼續シ來リタルモ益々金融硬塞シ多額ノ負債ヲ生シ之カ辨濟ニ窮シタル結果昭和四年七月五日頃前記若村商店ニ於テ店員坂本義夫ヲシテ合資會社若村商店代表社員若村太郎振出名義ノ金額一千七百八十圓支拂期日昭和十一年十月三十一日支拂地大阪市支拂場所株式會社野村銀行新町支店拂出日附同年六月五日支拂人稻葉吾郎受取人ノ氏名記載ナキ爲替形一通ヲ作成セシメタル上行使ノ目的ヲ以テ其ノ引受欄ニ昭和十一月六月五日稻葉吾郎ト記入セシメ自ラ其ノ名下ニ有合印ヲ押捺シ以テ實在セサル稻葉吾郎ニ於テ同日右手形ニ引受ヲ爲シタル如ク虛偽ノ記入ヲ完成シ同月十九日店員田幡當三ヲ同市A町五十六番地山地謙三方ニ遣ハシ豫テ割引ヲ受ケ交付シ居リタル金額一千六百三十九圓七十錢ノ爲替手形債務ノ支拂トシテ右虛偽引受記入ノ爲替手形ヲ真正ニ引受アリタル手形ノ如ク裝ヒテ交付セシメ以テ之ヲ行

使シ同人ヲシテ其ノ旨誤信セシメ因テ割引手数料其ノ他ヲ差引キタル殘額ニ相當スル前記金額一千六百三十九圓七十錢ノ爲替手形債務カ完済セラレタルモノトシテ該爲替手形一通ヲ返還セシメテ之ヲ騙取シタルモノナリ

前掲參考判例參照

第十六章 印章偽造

第一節 總 說

第一 加害行爲

- 一 公印章偽造 (第六十五條第一項)
 - 一 行使の目的を以て
 - 二 公務所又は公務員の
 - 三 印章若くは署名を
 - 四 偽造したること
- 二 公印章不正使用 (第六十五條第二項前段)

- 一 公務所又は公務員の
 - 二 印章若くは署名を
 - 三 不正に使用したること
- 三 偽造公印章使用 (第六十五條第二項後段)
- 一 偽造したる
 - 二 公務所又は公務員の
 - 三 印章若くは署名を
 - 四 使用したること
- 四 公記號偽造 (第六十六條第一項)
- 一 行使の目的を以て
 - 二 公務所の
 - 三 記號を

四 偽造したること

五 公記號不正使用 (第百六十六條第二項前段)

一 公務所の記號を

二 不正に使用したること

六 偽造公記號使用 (第百六十六條第二項後段)

一 偽造したる

二 公務所の記號を

三 使用したること

七 私印章偽造 (第百六十七條第一項)

一 行使の目的を以て

二 他人の

三 印章若くは署名を

四 偽造したること

八 私印章不正使用 (第百六十七條第二項前段)

一 他人の

二 印章若くは署名を

三 不正に使用したること

九 偽造私印章使用 (第百六十七條第二項後段)

一 偽造したる

二 他人の

三 印章若くは署名を

四 使用したること

第二 参考判例

大正十一年大審院判例 文書ニ押捺シテ證明ノ用ニ供スルモノハ公務所ノ印章ニシテ產物商品書籍等ニ押捺スルモノハ公務所ノ記號ナリトスルハ本院ノ判例ニシテ所論大正二年(レ)第一一六號判決ノ如キモ亦此ノ趣旨ニ依レルモノナリト雖苟モ公務所ヲ表示スル證印ハ記號ニ非スシテ印章ナリトスルコト亦本院ノ判例ニシテ例ヘハ郵便局ノ日附印ノ如キハ文書ニ非サル郵便物ニ押捺スルトキト雖尙之ヲ以テ公務所ノ印章ナリト認ムヘキハ判例ノ趣旨ニ於テ疑ヲ容レサル所ナリトス蓋所論判例ハ何レモ公務所ノ表示アリト認ムヘカラサル事案ニ關スルモノニシテ殊ニ大正二年(レ)第一一六號判決ニ係ル富山縣三等輸出米検査證票ノ如キハ單ニ同縣三等輸出米ノ検査アリタルコトヲ示スニ止リ此ノ検査カ富山縣廳ニ依リ行ハレタル事實ヲ證明スル爲同縣廳ヲ表示シタルモノニ非サルカ故ニ此等ノ判例ハ公務所ヲ表示スル日附印ヲ公務所ノ印章ナリトスル判例ノ趣旨ヲ覆スモノニアラス

第三 書 方 要 領

印章又は署名偽造なりや、記號偽造なりや、或は文書偽造なりやの區別は中々難しい、事に當リ判例其の他により十分研究して之を確定し、其の旨明示しなければならぬ。

第二節 犯罪事實の實例

私印章署名偽造使用詐欺 (第六百六十七條第一項第二項後段、第二百四十六條)

被疑者須藤信ハ故濱口雄幸ノ筆跡ヲ模シタル書ヲ作成シ其ノ落款ヲ偽造シ之ヲ眞筆トシテ他人ニ賣却シ其ノ代金名下ニ金員ヲ騙取センコトヲ企テ

第一 昭和十二年八月上旬頃高知市A町自宅ニ於テ濱口雄幸ノ筆跡ヲ模シテ爲政以德云々ノ書ニ枚ヲ書シ各行使ノ目的ヲ以テ之ニ同人ノ雅號「空谷」ト書シ其ノ下ニ豫テ自ラ印刻シ置キタル濱口雄幸及空谷ナル二箇ノ印ヲ押捺シ同人ノ落款ヲ順次作成シ以テ同人ノ印章署名ヲ偽造シ

第二 同月下旬頃同市B町木村朝太郎方ニ到リ右書ノ内一枚ヲ濱口雄幸ノ眞筆ト詐リテ右朝太郎ニ示シ右偽造ノ印章署名ヲ使用シ之ヲ金五十圓ニテ賣却スヘキ旨申向ケ

テ右朝太郎ヲシテ該書ハ濱口雄幸ノ眞筆ナリト誤信セシメ因テ同人ヲシテ其ノ買受
 代金名下ニ金五十圓ヲ交付セシメテ騙取シ
 タルモノナリ

第十七章 偽 證

第一節 總 說

第一 加 害 行 爲

一 偽 證 (第百六十九條)

- 一 法律に依り宣誓したる
- 二 證人が
- 三 虚偽の
- 四 陳述を爲したること

二 虚偽鑑定通譯

- 一 法律に依り宣誓したる
- 二 鑑定人又は通事が
- 三 虚偽の
- 四 鑑定又は通譯を爲したること

第二 参 考 判 例

大正七年大審院判例 偽證罪ノ成立スルニハ適法ニ宣誓シタル證人カ故意ニ自己ノ認識ニ反シテ虚偽ノ陳述ヲ爲シタルコトヲ要ス

大正六年同 犯人カ自己ニ對スル刑事被告事件ニ付キ證人トシテ呼出ヲ受タル者ヲ教唆シ宣誓ノ上虚偽ノ陳述ヲ爲サシメタル以上偽證教唆罪ハ完全ニ成立スルモノナレハ同事件ニ付テハ自ラ證人タルヘキ資格ナク又同事件ニ付其ノ罪ヲ免レン爲メ犯シタルノ故ヲ以テ偽證教唆ノ罪責ヲ免ルルコトヲ得サルモノトス

第三 書 方 要 領

適法に宣誓したる事實を明示しなければならぬ。或特定の事實に付故意に自己の認識に反して陳述したることを明にする。

第二節 犯罪事實の實例

民事々件證人の偽證 (第六十九條)

被疑者高橋はつハ昭和八年十一月三十日靜岡縣A郡Y町Y區裁判所ニ於テ原告平田正一、被告高橋毅同年第三百二十九號貸金請求訴訟事件ノ證人トシテ宣誓シタル上被告ハ原告ヨリ借受ケタル金千二百圓ニ對スル借用證書ヲ作成ノ上之ヲ昭和四年七月十三日C市A町五十三番地被告方ニ於テ直接原告ニ交付シタルカ其ノ後一部辨濟ヲ爲シ殘額金六百五十圓ト爲リ居タルトコロ被告ト原告ノ三女信子ト養子縁組ヲ爲スニ及ヒ原告ハ被告ニ信子ノ教育費及仕度金トシテ金千圓ノ贈與ヲ約シ前記金千二百圓ノ殘金

六百五十圓ヲ該千圓ヨリ差引決濟シタル上殘額三百五十圓ハ信子ニ婚ヲ貰フ際被告ニ
交付スルコトトシ昭和七年九月十九日被疑者カ原告方ニ赴キタル際原告ヨリ前記金千
二百圓ノ借用證書ノ返還ヲ受ケ之ヲ被告ニ交付シタルコトヲ知悉シナカラ

一 被告ハ右借用證書ヲ昭和四年七月十三日被被告方ニ於テ直接原告ニ手交シタルモノ
ニアラスシテ同年九月頃一旦證人ニ手交シ證人之ヲ原告方ニ持參シタルモノニシテ
其ノ際原告ハ親族ノ間柄ナル故其ノ必要ナキ旨答ヘ之ヲ受取ラサリシヨリ證人ハ自
宅ニ持歸リ筆筒ニ入レ置キタル處昭和八年五月末頃紛失シタル旨

二 原告ハ三女信子ト被告トノ養子縁組ニ際シ信子カ婚ヲ貰フ様ニナレハ金千圓ヲ信
子本人ニ贈與スル旨申シタルハ事實ナルモ被告ニ對シ信子ノ教育費及仕度金トシテ
金千圓ヲ贈與スル旨申シタル事實ナク從テ被告カ原告ヨリ借受ケタル金千二百圓ノ
殘金六百五十圓ヲ右金千圓ヨリ差引キ決濟シタル上殘金三百五十圓ハ信子ニ婚ヲ迎

フル際被告ニ渡スト申シ其ノ爲證人カ原告ヨリ前記金千二百圓ノ借用證書ノ交付ヲ
受ケタル事實ナキ旨

各虛偽ノ事實ヲ陳述シ偽證シタルモノナリ

第十八章 誣告

第一節 總說

第一 加害行為

四 告 (第七百七十二條)

- 一 人をして
- 二 刑事又は懲戒の處分を受けしむる目的を以て
- 三 虚偽の申告を爲したること

第二 参考判例

明治四十二年大審院判例 人ヲシテ處罰ヲ受ケシムル爲虚偽ノ事實ヲ當該官ニ申告シタル所爲ハ其ノ口頭ニ

依ルト否トヲ問ハス又書面ニ依ル場合ニハ署名アルト匿名ナルト將タ他人ノ名義ヲ用キタルトヲ論セス同
シク誣告罪ヲ構成スルモノトス

大正四年同 誣告犯人カ申告書ヲ郵便ニ付シタル場合ニ在リテハ其ノ罪ハ該申告書カ相當官廳ニ到達シタル
時ニ於テ成立ス

第三 書方要領

目的犯なるにより目的を明示する必要あるは勿論申告内容を具體的に然も簡潔に示す必要あり。

第二節 犯罪事實の實例

誣告 (第七百七十二條)

疑疑者野口龜太郎ハ昭和十一年五月頃ヨリA市B町二十七番地西村鐵工所ニ職工ト
シテ雇ハレ居ルモノナルトコロ同十二年三月中旬頃同鐵工所職工同市N町七番地今田

助市ト共ニ飲酒シタル際些細ノコトヨリ口論トナリ同人ヨリ毆打セラレタルヲ深ク遺恨ニ思ヒ其ノ恨ミヲ霽サントシテ同年四月二十一日頃同人ヲシテ刑事ノ處分ヲ受ケシムル目的ヲ以テT縣A警察署長ニ對シ今田助市カ同年四月上旬頃ヨリ數回ニ亙リ同鐵工所ヨリ古鐵ヲ竊取シタル旨ノ虚偽ノ内容ヲ記載シタル投書ヲ郵送シ翌二十二日同署長ニ到達セシメテ虚偽ノ申告ヲ爲シ以テ誣告ヲ爲シタルモノナリ

第十九章 猥褻、姦淫

第一節 總說

第一 加害行爲

- 一 公然猥褻 (第百七十四條)
- 一 公然
- 二 猥褻の行爲を爲したること
- 二 猥褻文書頒布 (第百七十五條)
- 一 猥褻の文書圖畫其の他の物を
- 二 頒布若くは販賣し又は公然陳列したること

三 強制猥褻 (第七十六條前段)

一 十三歳以上の

二 男女に對し

三 暴行又は脅迫を以て

四 猥褻の行爲を爲したること

四 幼者猥褻 (第七十六條後段)

一 十三歳未満の

二 男女に對し

三 猥褻の行爲を爲したること

五 一般強姦 (第七十七條前段)

一 暴行又は脅迫を以て

二 十三歳以上の

三 婦女を

四 姦淫したること

六 幼女強姦 (第七十七條後段)

一 十三歳未満の

二 婦女を

三 姦淫したること

七 準強制猥褻強姦 (第七十八條)

一 人の心神喪失若くは抗拒不能に乗じ又は人をして心神を喪失せしめ若くは抗拒不能ならしめ

て

二 其の者に對し

三 猥褻の行爲を爲し又は姦淫したること

八 強姦致死傷 (第八十一條)

第十九章 猥褻、姦淫

- 一 三乃至七の罪又は其の未遂罪を犯し
- 二 因て其の被害者を
- 三 死亡せしめ又は傷害したること

九 淫行勧誘 (第八十二條)

- 一 營利の目的を以て
- 二 淫行の常習なき婦女を
- 三 勧誘して
- 四 姦淫せしめたること

一〇 姦 通 (第八十三條)

- 一 有夫の婦
 - 二 姦通したること
- (其の相姦者亦同様)

第二 參考判例

大正六年大審院判例 販賣トハ不定多衆ニ對シテ爲スノ目的ニ出テタル有償的ノ讓渡行爲ヲ指稱シ苟クモ其ノ目的ニ出ツル以上ハ單ニ一人ニ對シ一回ノ有償的讓渡ヲ爲シタルニ止マル場合ト雖モ之ヲ同條ニ所謂販賣ト謂フヲ妨ケス

大正十四年同 刑法第七十七條後段ノ犯罪ノ成立ニハ姦淫ノ當時犯人カ被害者ヲ十三歳未満ナルコトヲ認識スルコトヲ要スルモノトス

第三 書方要領

猥褻文書頒布等に於て、該文書の内容を一應具體的に表し、其の猥褻なることを明にする必要あるは勿論であるが、餘りに穿ち過ぎて、文章自體卑猥に墮するが如きは斷然避けなければならぬ。其の他の猥褻罪に於ける猥褻行爲の内容に付ても同様である。

第二節 犯罪事實の實例

一 猥褻本等販賣所持 (第七十五條)

被疑者小出友七ハ

- 一 昭和十四年三月上旬頃ヨリ同年五月中旬頃マテノ間數十回ニ亙リ大阪市北區A町六百九十番地自宅ニ於テ奈良市A町十二番地鎌田孝次郎外數名ニ對シ「フアンニール」の思ひ出」ト題スルモノ外數種ノ執レモ男女交接ノ狀景ヲ敘述シタル猥褻本約五百部ヲ一部三十錢乃至一圓五十錢ノ代價ニテ又男女交接ノ姿態ヲ顯出シ或ハ女子ノ陰部ヲ映出セル猥褻寫眞約百組ヲ合計約金二百圓ニテ各賣却シ
- 二 同年四月中旬頃前記自宅ニ於テ前記同様ノ猥褻本二十餘部並前記同様ノ猥褻寫眞約百組ヲ販賣ノ目的ヲ以テ所持シ

タルモノナリ

二 強姦未遂 (第七十七條 第七十九條)

被疑者大木幸一ハ昭和十四年五月十一日午後十一時頃夜遊ノ歸途千C葉縣郡T村S田圃道ニ於テ久保田洋子(當二十四年)ノ通行スルヲ目撃スルヤ劣情ヲ起シ同女ヲ姦淫セシコトヲ決意シ同女ニ近ツキ矢庭ニ同女ノ肩ニ手ヲ掛ケテ押倒シタル上「俺ノ言フコトヲ聽ケ聽カナケレバ殺スゾ」ト脅迫シタルモ通行人ニ誰何セラレテ其ノ場ヲ逃走シ所期ノ目的ヲ遂ケサリシモノナリ

註 既遂の場合は「……ト脅迫シ同女ヲシテ極度ニ畏怖セシメ其ノ反抗ヲ抑壓シテ同女ヲ姦淫シ所期ノ目的ヲ遂ケタルモノナリ」と書く。

三 淫行勸誘 (第八十二條)

被疑者吉川つまハ營利ノ目的ヲ以テ昭和八年十月中旬頃東京市江戸川区A町二丁目十五番地自宅ニ於テ淫行ノ常習ナキ同町二丁目三百八十五番地並木助一方林田ひさ(當二十年)ニ對シ衣類其ノ他女ノ所持品一切ヲ買與フルニ依リ客ト情交スヘキ旨勸誘シ同女ヲシテ同九年三月頃迄ノ間數十回ニ亘リ前記自宅ニ於テ氏名不詳ノ男子數十名ト姦淫セシメ右男子等ヨリ合計金百數十圓ヲ取得シタルモノナリ

四 姦 通 (第八十三條第一項)

被疑者原チヨハ昭和六年一月四日原庄一ト婚姻シA市B町一番地ニ於テ夫ト共ニ酒類小賣商ヲ營ミ居リタルモノニシテ被疑者吉田豊ハ其ノ隣家ニ居住シ雜貨行商ヲ爲シ居リタルモノナルトコロ被疑者兩名ハ昭和七年三月上旬頃ヨリ同年九月下旬頃迄ノ間前後廿數回ニ亘リ被疑者チヨ方又ハ被疑者豊方ニ於テ互ニ情交ヲ遂ケ相姦通シタルモノナリ

第二十章 賭 博

第一節 總 說

第一加害行爲

- 一 賭 博 (第八十五條)
 - 一 偶然の輸贏に關シ
 - 二 財物を以て
 - 三 博戲又は賭事を爲したること
- 二 常習賭博 (第八十六條第一項)
 - 一 常習として

- 二 一の罪を犯したること
- 三 賭博場開帳 (第百八十六條第二項)
 - 一 賭博場を開帳し又は博徒を結合して
 - 二 利を圖りたること

第二 参考判例

大正十一年大審院判例 偶然ノ輸贏トハ當事者ニ於テ確實ニ豫見シ又ハ當事者ノ意志ヲ以テ自由ニ支配スルコトヲ得サル事實ニ關シテ勝負ヲ決スルコトヲ謂フモノトス

昭和八年同 金錢ハ多少ニ拘ラス一時ノ娛樂ニ供スル物ト謂フヲ得ス

大正十二年同 常習トハ賭博ヲ反覆累行スル習癖ヲ謂フ

大正十二年同 犯人カ圖利ノ目的ヲ以テ自ら主宰者トナリ賭博ヲ爲スヘキ場所ヲ開設シタルトキハ其ノ賭博ヲ爲スヘキ者ヲ招致スルト否トヲ問ハズ賭博開帳罪ヲ成立スルモノトス

第三 書方要領

通常ありふれた賭博例へば花合せ、株、丁半、本引等は其の使用賭具を表すだけで其の方法は表さないのが普通である。

チーハー、鬮鷄賭博等特殊なものは其の方法も簡単に表はして置く。

賭博場開帳は最も典型的な場合として

- 一 他人を誘引すること
- 二 賭博場を提供すること
- 三 賭博を主宰すること
- 四 利を圖ること

の四要件を含むと謂はれてゐる。従て賭博場開帳の犯罪事實には此の四要件を明示するのが普通である。併し前掲判例にもある通り、他人を誘引することは必ずしも要件ではないから、誘引の事

實がなく然も賭博場開帳が認められると云ふ場合は勿論、誘引の事實は書けない譯である。

第二節 犯罪事實の實例

一 青丹賭博同封助 (第八十五條 第六十二條)

第一 被疑者田中三郎、三宅爲次郎、大石春信、藤山幸一ハ昭和十二年二月十八日午後十時頃ヨリ翌十九日午前二時頃迄ノ間東京市A區B町二丁目七番地被疑者佐渡ミヨ方奥六疊ノ間ニ於テ金錢ヲ賭シ骨牌ヲ使用シ俗ニ青丹ト稱スル賭博ヲ爲シ

第二 被疑者佐渡ミヨハ被疑者田中三郎ノ依頼ニ應シ前記賭博ニ付前記自宅奥六疊ノ間ヲ賭房トシテ提供シ該犯行ヲ容易ナラシメテ之ヲ幫助シタルモノナリ

二 普通並常習の賽本引賭博 (第八十六條第一項)

第一 被疑者春木常次、青山信一、木村宮介、戸田定夫ハ外一名ト共ニ昭和十二年七月十九日午後八時頃ヨリ翌二十日午前四時頃迄ノ間大阪市北區A町一丁目二百七十六番地被疑者戸田定夫方ニ於テ金錢ヲ賭シ骨子骨牌等ヲ使用シ俗ニ賽本引ト稱スル賭博ヲ爲シ

第二 被疑者川本清治郎ハ賭博常習者ナルトコロ前記被疑者等ト共ニ前記賭錢賭博ヲ爲シタルモノナリ

三 手本引賭博並賭博場開帳 (第八十六條第二項)

第一 被疑者山上信太郎、宮田孝助、土本行道、安藤太治郎ハ昭和十二年三月五日午

後七時頃ヨリ同十一時頃迄ノ間大阪市東成區A町七百十番地被疑者岡道太郎方ニ於テ金錢ヲ賭シ骨牌等ヲ使用シ俗ニ手本引ト稱スル賭博ヲ爲シ

第二 被疑者岡道太郎ハ前同日前記被疑者等ヲ前記自宅ニ誘引シテ賭博場ヲ開帳シ同人等ヲシテ前記賭錢賭博ヲ爲サシメ其ノ勝者ヨリ寺錢名下ニ合計約金二十五圓ヲ徵集シ利ヲ圖リタルモノナリ

第二十一章 禮拜所不敬等

第一節 總說

第一 加害行爲

- 一 禮拜所不敬 (第百八十八條第一項)
- 一 神祠佛堂墓所其他禮拜所に對シ
- 二 公然
- 三 不敬の行爲をなしたること
- 二 説教等妨害 (第百八十八條第二項)
- 一 説教禮拜又は葬式を

- 二 妨害したること
- 三 墳墓發掘 (第百八十九條)
 - 一 墳墓を
 - 二 發掘したること
- 四 死體遺棄等 (第百九十條)
 - 一 死體遺骨遺棄又は棺内に藏置したる物を
 - 二 損壞し、遺棄し、又は領得したること
- 五 墳墓發掘死體遺棄等 (第百九十一條)
 - 一 墳墓を
 - 二 發掘して
 - 三 死體遺骨遺棄又は棺内に藏置したる物を
 - 四 損壞し、遺棄し、又は領得したること

六 變死者に関する罪 (第百九十二條)

- 一 檢視を経ずして
- 二 變死者を
- 三 葬りたること

第二 参考判例

大正六年大審院判例 死體遺棄罪ハ葬祭ニ關スル良俗ニ反スル行爲ヲ罰スルニ在ルヲ以テ死體ヲ他ニ移シテ之ヲ遺棄スル場合ハ勿論葬祭ヲ爲スヘキ義務ヲ有スル者カ葬祭ノ意思ナクシテ死體ヲ放置シ其ノ所在ノ場所ヨリ離去スル如キモ亦死體遺棄罪ヲ構成スルモノトス

昭和六年同 妊娠四ヶ月以上ノ死胎ハ刑法第百九十條ニ所謂死體ニ該當ス

第三 書方要領

此の章で一番多いのは死體遺棄罪であるが、特に述べておく點はないやうである。實例を参照さ

第二節 犯罪事實の實例

嬰兒殺竝其の死體遺棄 (第九十九條 第九十一條)

被疑者ハ千葉縣印旛郡R村千七百八十九番地ニ於テ小作農ヲ營ミ一家八人ノ生計ヲ營ミ居リタルモ收入ノ寡少ト多額ノ負債トニ生活極メテ困難ナリシ處同人ノ妻まきカ懷妊シ昭和十三年五月二十八日夜産氣付クヤ嬰兒出生後ニ於ケル生活苦ノ一層深刻ナルヘキヲ憂ヘ出生ノ上ハ之ヲ殺害センコトヲ決意シ

第一 同日午後十二時頃まきカ前記自宅奥六疊ノ間ニ於テ妊娠十ヶ月ノ男性兒ヲ分娩スルヤ直ニ其ノ場ニ於テ左手ヲ以テ該兒ノ咽喉ヲ強壓シ窒息死ニ至ラシメテ所期ノ目的ヲ遂ケ

第二 翌二十九日午前四時半頃前記犯行ヲ隱蔽センカ爲右嬰兒ノ死體ヲ自宅母家西南

方ノ灰小屋内便壺ノ傍ニ埋没シ以テ該死體ヲ遺棄シ

タルモノナリ

第二十二章 瀆 職

第一節 總 說

第一 加 害 行 爲

- 一 職權濫用強要 (第九十三條)
- 一 公務員
- 二 其の職權を濫用し
- 三 人をして
- 四 義務なきことを行はしめ又は行ふべき權利を妨害したること
- 二 職權濫用逮捕監禁 (第九十四條)

- 一 裁判檢察警察の職務を行ひ又は之を補助する者
- 二 其の職權を濫用し
- 三 人を
- 四 逮捕又は監禁したること
- 三 職務執行に際しての暴行凌虐 (第九十五條第一項)
- 一 裁判檢察警察の職務を行ひ又は之を補助する者
- 二 其の職務を行ふに當り
- 三 刑事被告人其他の者に對し
- 四 暴行又は凌虐の行爲を爲したること
- 四 看守者等暴行凌虐 (第九十五條第二項)
- 一 法令に因り拘禁せられたる者を
- 二 看守又は護送する者

- 三 被拘禁者に對し
- 四 暴行又は凌辱の行爲を爲したること
- 五 暴行凌辱致死傷 (第九十六條)
 - 一 二乃至四の罪を犯し
 - 二 因て人を死傷に致したること
- 六 收 賄 (第九十七條第一項前段)
 - 一 公務員又は仲裁人
 - 二 其の職務に關し
 - 三 賄賂を
 - 四 收受し又は要求し若くは約束したること
- 七 收賄に因る不正行爲 (第九十七條第一項後段)
 - 一 公務員又は仲裁人

- 二 其の職務に關し
- 三 賄賂を
- 收受し又は要求し若くは約束し
- 五 因て不正の行爲を爲し又は相當の行爲を爲さざること
- 八 贈 賄 (第九十八條)
 - 一 公務員又は仲裁人に
 - 二 賄賂を
 - 三 交付し提供し又は約束したること

第二 參考判例

大正十一年大審院判例 公務員トハ法令ニ依リ國家又ハ公共團體ノ機關トシテ公務ニ從事スル者ヲ指稱シ官

公吏ニ限ラス

第二十二章 職

大正五年同 刑法第九十七條ニ所謂仲裁人トハ民事訴訟法第七百八十六條以下ニ規定スル如ク法規ニ基キ仲裁人ノ職ニ在ルモノ、謂ニシテ自ら進ンテ紛議ノ示談和解ヲ斡旋盡力スルモノ、如キハ茲ニ所謂仲裁人ニ該當セス

明治四十二年同 收賄罪ハ公務員又ハ議員等ノ職ニ在ル者カ其ノ職務ニ關シ不正ニ財物ノ收受等ヲ爲シタルトキニ非レハ成立セサルモノトス

大正四年同 公務員其ノ職務ニ關シ賄賂ヲ約束シ後轉シテ他ノ職務ヲ執ルニ至リ曩日ノ約束ニ基キ金品ヲ收受シタル行爲ハ賄賂約束罪ヲ構成スルモ賄賂收受罪ヲ構成スルモノニアラス

大正五年同 賄賂ハ必スシモ不正行爲ニ對スル反對給付タルコトヲ要セサルヲ以テ苟モ公務員又ハ仲裁人カ其ノ職務ニ關シ收受シタル利益ナル以上ハ該職務行爲自體ハ正當ナリトスルモノ之ヲ賄賂ナリト解シ得ヘキモノトス

大正九年同 普通人ノ需要若ハ慾望ヲ充タスニ足ルヘキ一切ノ利益ハ賄賂タルノ適性ヲ有スルモノニシテ該利益ハ必スシモ確定的若ハ永續的ナルヲ要セス單ニ一時的ニ人ノ欲求ヲ満足セシムルニ足ルモノモ亦之ヲ公務員ノ職務ニ關スル報酬トシテ均ク賄賂ノ目的ト爲スコトヲ得ルモノトス

大正十二年同 提供トハ贈賄者カ相手方ニ對シ贈賄ノ申込ヲ爲シ以テ之カ受領ヲ求ムルノ意思ヲ表示スルノ謂ナリ

第三 書 方 要 領

瀆職は身分犯である。被疑者が一定の身分を必要とする場合(第九十三條乃至第九十七條)と相手方例へば賄賂の交付提供を受けたる者、受くる約束を爲したる者が一定の身分を必要とする場合(第九十八條)がある。夫々身分を明示しなければならぬ。職權濫用を構成要件とする場合に於ては被疑者の職權を明示し之を濫用せる事實を具體的に明ならしめる。

贈賄收賄等に於ては賄賂が職務に關することを明示する必要がある。例へば或職務事項に關し或請託を爲し其の報酬として金五百圓を交付したと書き表す如きである。

第二節 犯罪事實の實例

一 市會の議事に關する贈收賄並賄賂提供 (第九十七條第一項前段 第九十八條)

被疑者堀之内敬吉ハ神奈川縣N郡S村大字Tノ資産家ニシテ同地方ニ多クノ土地ヲ所有シ居リ被疑者飯塚兵五郎ハ昭和二年三月以來Y市會議員ノ職ニアルモノナルトコロ第一 被疑者敬吉ハ

(一) 同年五月Y市會ニ於テ市營共同墓地ノ設置ヲ可決シ市理事者ニ於テ該敷地ノ選定ヲ開始スルヤ右S村大字T所在ノ自己所有土地ヲ該敷地ニ選定セシメ利得センコトヲ企テ被疑者兵五郎ニ其ノ運動方ヲ依頼シ居タルカ同年九月上旬頃市理事者ニ於テY市N區H町内ニ該敷地ヲ選定シ之ヲ同市會ニ提案セントスル情勢ナルコトヲ聞知スルヤ同月二日頃同市K區A町二丁目七番地被疑者兵五郎方ニ於テ同人ニ對シ右提案カ實現シタル場合之ヲ否決セシムル爲反對投票方竝他ノ市會議員ノ買收方ヲ請託シ其ノ報酬トシテ金五百圓ヲ交付シ以テ同人ノ市會議員タル職務ニ關シテ贈賄シ

(二) 同月十四日頃同市N區B町五百十六番地同市會議員清水純三郎方ニ於テ同人ニ對シ前同様ノ請託ヲ爲シ之ニ應セラルルニ於テハ其ノ報酬トシテ金五百圓ヲ交付スヘキ旨申向ケ以テ同人ノ市會議員タル職務ニ關シテ賄賂ヲ提供シ

第二 被疑者兵五郎ハ前記第一記載ノ日時場所ニ於テ被疑者敬吉ヨリ前記第一記載ノ趣旨ニテ供與セラルルコトヲ諒知シナカラ金五百圓ヲ收受シ以テ自己ノ市會議員タル職務ニ關シテ收賄シタルモノナリ

二 變應に依る贈收賄 (前同)

被疑者等ハ何レモ東京府A郡B町々會議員ナルトコロ昭和十年三月二十九日被疑者馬場六郎カ同町長ヲ退職シタルニヨリ同町々會ニ於テ其ノ後任町長ヲ選舉スルコトト

ナルヤ鹿島千次及川鐵右衛門ノ兩名其ノ候補者ト爲リ運動中

一 被疑者鹿島千次同岩崎銀藏ハ共謀ノ上同月十五日千葉縣K郡G町六番地旅館兼料理店鈴村館事鈴村三郎方ニ其ノ餘ノ被疑者等十三名ヲ招シタル上同人等ニ對シ前記町長選舉ニ付結束シテ前記鹿島千次ニ投票セラレ度キ旨請託シ其ノ謝禮トシテ合計金二百二十六圓相當ノ饗應ヲ爲シ以テ同人等ノ町會議員タル職務ニ關シテ贈賄シ

二 被疑者井口晴吉同小宮次郎兵衛同小宮金次郎同森田友次郎同小泉春吉同松山金藏同森山靜夫同瀧山秀一同佐々木高綱同藤原太郎同馬場六郎同上原正三及同宇田川彦三郎ハ前記日時場所ニ於テ被疑者鹿島千次同岩崎銀藏ノ兩名ヨリ前記ノ如ク鹿島千次ニ對スル投票方ノ請託ヲ受ケ其ノ謝禮トシテ合計金二百二十六圓相當ノ饗應ヲ受ケ以テ夫々自己ノ町會議員タル職務ニ關シテ收賄シタルモノナリ

第二十三章 殺 人

第一節 總 說

第一 加 害 行 爲

- 一 殺 人 (第百九十九條)
- 一 人 を
- 二 殺 したること
- 二 尊屬殺人 (第二百條)
- 一 自己又は配偶者の
- 二 直系尊屬を

- 三 殺したること
- 三 自殺教唆等 (第二百二條前段)
 - 一 一人を
 - 二 教唆又は幫助して
 - 三 自殺せしめたること
- 四 囑託殺人等 (第二百二條後段)
 - 一 被殺者の
 - 二 囑託を受け若くは其の承諾を得て
 - 三 之を殺したること

第二 參考判例

大正八年大審院判例 胎兒カ生活機能ヲ具備シテ母體ヨリ其ノ全部若クハ一部ヲ露出シタル以上タトヒ假死

ノ状態ニ在リテ未タ呼吸作用ヲ開始セサルモ生命ヲ保有スルモノナルカ故ニ殺人罪ノ客體トナリ得ヘキ人ナリト云ハサルヘカラス

大正十一年同 自殺幫助ハ自殺ノ希圖ヲ有シ而モ自ラ之ヲ實行セントスルニ當リ其ノ方法ヲ指示シ若ハ器具ヲ供スル等之カ實行ヲ容易ナラシムル行爲ヲ云ヒ囑託殺人トハ被害者自殺ノ希圖ヲ有スルモ自ラ之ヲ實行スルノ意思ナキ場合ニ於テ其ノ依囑ヲ受け受託者自ラ手ヲ下シテ其ノ希圖ヲ實現セシムル行爲ヲ指スモノト解スルヲ正當トス

第三 書方要領

殺人は動機犯である。犯行の動機を簡に失せず冗に亘らざるやう記載する必要がある。殺人罪の成立には被疑者に殺意のあつたことが必要である。殺意がなかつたとすれば傷害致死罪を構成するに過ぎない。故に犯罪事實の記載に殺意のあつたことを落してはならない。

第二節 犯罪事實の實例

被疑者上田よしハ昭和九年三月十一日隣家田中作一方茶ノ間ニ無斷立入りタルコトアリテ當時Y警察署ニ於テ取調ヲ受ケタルカ田中良平等ノ仲裁ニヨリ右作一ニ對シ被疑者及被疑者ノ父鈴木一連署ノ訛證ヲ差入レ示談解決シタル處被疑者ハ右訛證ヲ差入レタルヲ痛ク無念ニ思ヒ延テ訛證ヲ差入ル、ニ及ヒタルハ右良平ノ差金ニヨルモノナリト斷シ同人ニ反感ヲ有スルニ至リタル折柄良平カ其ノ小作人等ヲシテ各所ニ於テ被疑者ノ惡評ヲ吹聴セシメ居ル由ヲ聞知スルヤ良平ヲ怨ムコト甚クシク偶々同年四月十五日右良平方ニ夫與助ノ病氣全快祝トシテ赤飯ヲ配ルニ際シ報復ノ爲同人ヲ殺害センコトヲ決意シ山形市A町五番地被疑者方臺所ニ於テ豫テ果樹消毒用トシテ購入シアリタル毒藥砒酸鉛ヲ赤飯ニ混入シ之ヲ重箱ニ詰メタル上長男一郎ニ命シテ良平方ニ配リ即日同人ヲシテ右赤飯ヲ食セシメ因テ同月二十日午前一時頃砒素中毒ニヨリ死亡スル

ニ至ラシメ殺害ノ目的ヲ遂ケタルモノナリ

二 養父絞殺 (第二百條)

被疑者竹村雄二ハ竹村留三郎當六十九年ノ養子ニシテC市N町九百十九番地ニ同居シ家業ニ精勵シ居リタルカ留三郎ハ生來短慮且粗暴ニシテ被疑者ニ對シ苛酷ナル振舞ニ出ツルコト屢々ニシテ兩者間兎角圓滿ナラサリシトコロ昭和十年六月二十六日被疑者カ飯岡せいヲ娶ルニ及ヒ留三郎ハ不倫ニモせいニ對シ情交ヲ迫リタルコト一再ニ止マラス同女ハ極度ニ之ヲ嫌惡シ終ニ同年十月十五日家出スルニ至リタルヨリ被疑者ハ留三郎ノ無道ナル仕打ニ痛ク憤慨シ居リタル折柄同月十九日午後六時頃留三郎ト些細ノ事ヨリ口論ヲ始メ次テ格闘トナルヤ日頃ノ憤懣一時ニ激發シ遂ニ留三郎ヲ殺害センコトヲ決意シ直ニ其ノ場ニ在リタル手拭ヲ以テ同人ノ頸部ヲ絞メ因テ間モナク窒息死

ニ至ラシメ殺害ノ目的ヲ遂ケタルモノナリ

三 囑託殺人 (第二百二條)

被疑者木村榮太郎ハ昭和九年四月頃ヨリK市島田遊廓植田樓抱娼妓檜垣テルト馴染ヲ重ネ居タルカ其ノ間同女ヲシテ娼妓ヲ爲サシムルニ忍ヒス同女モ亦極度ニ之ヲ厭フニ至リタルモ境遇上思フニ任セス痛ク世ヲ果敢ミ居タルカ同十二年五月二十四日夜右植田樓ニ登樓スルヤテルヨリ情死ヲ迫ラレ之ニ同意シテ翌二十五日午後七時頃テルト共ニN縣T郡平田村大字山田領内山林ニ到リ同所ニ於テテルヨリ同女ノ殺害方囑託ヲ受クルヤ之ニ應シ同女カ自ラ其ノ頸部ニ卷付ケタル腰紐ヲ兩手ニテ絞メ付ケ窒息死ニ至ラシメ之ヲ殺害シタルモノナリ

第二十四章 傷 害

第一節 總 說

第一 加害行爲

- 一 傷 害 (第二百四條)
 - 一 人の身體を
 - 二 傷害したること
- 二 傷害致死 (第二百五條第一項)
 - 一 人の身體を
 - 二 傷害し
- 三 因て之を死に致したること

三 尊屬傷害致死 (第二百五條第二項)

- 一 自己又は配偶者の
 - 二 直系尊屬を
 - 三 傷害し
 - 四 因て之を死に致したること
- 四 暴行 (第二百八條)
- 一人に
 - 二 暴行を加へたること

第二 參考判例

昭和六年大審院判例 傷害トハ體軀ノ完全ヲ害スルノ謂ニシテ生活機能ニ障碍ヲ與フル一切ノ場合ヲ包含ス
 大正三年同 小兒ヲ背負ヒタル者ヲ突飛ハス行爲ハ其ノ小兒ニ對シテモ亦暴行ナルコト論ヲ俟タス從テ之カ

爲小兒ニ負傷セシメタルトキハ傷害罪ノ責ヲ免ル、コトヲ得サルモノトス

大正六年同 苟モ他人ニ對シ故意ニ暴行ヲ加ヘ傷害ノ結果ヲ生セシメタル以上ハ縱令其ノ傷害ノ結果カ犯人ノ目的トシタルモノト異ナル客體ノ上ニ生シタル場合ト雖モ暴行ノ意思ト傷害ノ結果トノ間ニ因果關係ノ存在ヲ認ムルコトヲ得ヘキヲ以テ傷害罪ノ成立要件ニ缺クル所ナケレハ刑法第二百四條ノ罪責ヲ負フヘク暴行ノ認識ナキ過失傷害ヲ以テ論スヘキモノニ非ス

昭和四年同 暴行ヲ加フルノ意思アリテ暴行ヲ加ヘ傷害又ハ致死ノ結果ヲ生シタル以上縱令傷害ノ意思ナキ場合ト雖傷害罪又ハ傷害致死罪成立ス

大正十二年同 暴行カ傷害致死ノ一原因ト爲レル以上ハ縱令被害者ノ身體ニ對スル醫師ノ診療宜シキヲ得サリシコトカ他ノ一因ヲ成シタリトスルモ暴行ト致死トノ間ニ因果關係ヲ認ムヘキモノトス

大正十一年同 暴行トハ人ノ身體ニ對シ不法ニ攻撃ヲ加フルノ義ナリ

明治四十五年同 人ノ毛髮鬚髯ヲ截斷若ハ剃去スル行爲ハ人ノ身體ノ一部ニ對スル不法侵害タル暴行ニシテ唯傷害ノ結果ヲ生セシメサルニ過キサルヲ以テ刑法第二百八條ノ暴行罪ヲ以テ之ヲ處罰スヘキモノトス

第三 書方要領

傷害の方法部位程度を明示しなければならぬこと勿論であるが程度は醫師の診断に基き治療日数を以て表すのが普通である。併し特殊の場合例へば治療方法として手術を施し右手首より切斷するに至つたと云ふやうな場合は此の事實を明示しなければならぬ。犯行の動機についても簡単に書いておく必要がある。併し日常ありふれた喧嘩等に於ては「些細ノコトヨリ口論ノ末」と片付けて了ふこともある。

第二節 犯罪事實の實例

一 カフェーノ相客ヲ傷害 (第二百四條)

被疑者吉岡信ハ昭和十年五月十五日午後十時頃松田倉一ト共ニ東京市下谷區〇町一

丁目十五番地カフェー都ニ於テ飲酒中右松田カ折柄同店ニ於テ飲酒シ居リタル同町三丁目二番地鈴木信夫ト口論ヲ始ムルヤ矢庭ニ同人ノ胸倉ヲ捕ヘ「野郎生意氣ダ外へ出ロ」ト叫ヒツ、之ヲ戶外ニ引出シ所携ノ七首ヲ以テ右鈴木ニ斬付ケ因テ同人ノ右手首ニ治療日數約五週間ヲ要スル傷害ヲ負ハシメタルモノナリ

二 傷害致死 (第二百五條第一項)

被疑者内山定夫ハ昭和八年九月二十三日午後十一時三十分頃村越重夫外十四名ト共ニC縣T郡A村Mニ映畫見物ニ赴キテノ歸途同所深山藤三郎方附近道路ニ差蒐リタル際右村越カ折柄通り掛リタル同村N高根常夫ト口論シ次テ組打ヲ始メタルヨリ村越ニ加勢シ矢庭ニ所携ノ双渡四寸餘ノ七首ヲ振ヒ高根ノ後方ヨリ其右ノ臀部ニ突刺シ深サ小腸ニ達スル刺創ヲ負ハシメ因テ同人ヲシテ同月二十七日午前八時頃腸内出血ニヨリ

死亡スルニ致ラシメタルモノナリ

三 單純暴行 (第二百八條)

被疑者小川元市ハ豫テヨリ隣家ナルA市B町百二十一番地本山一信ト犬猿モ只ナラサル仲ナリシ處昭和十一年四月一日午後九時頃酒氣ヲ帯ヒテ他出先ヨリノ歸途右本山一信方前ニ於テ同人ニ出會フヤ「野郎」ト怒鳴リツ、手拳ヲ以テ一回其ノ頭部ヲ毆打シ暴行ヲ爲シタルモノナリ

第二十五章 過失傷害

第一節 總說

第一 加害行為

- 一 過失傷害 (第二百九條)
- 一 過失に因り
- 二 人を
- 三 傷害したること
- 二 過失致死 (第二百十條)
- 一 過失に因り

- 二 人を
- 三 死に致したること
- 三 業務上過失傷害（第二百十一條）
 - 一 業務上必要なる注意を
 - 二 怠り
 - 三 因て
 - 四 人を
 - 五 傷害したること
- 四 業務上過失致死（第二百十一條）
 - 一 業務上必要なる注意を
 - 二 怠り
 - 三 因て

- 四 人を
- 五 死に致したること

第二 参考判例

大正三年大審院判例 業務上ノ過失傷害罪ヲ斷スルニ當リテハ其ノ前提トシテ被告ニ過失アリタルヤ否ヲ判斷スルニ必要ナル業務上ノ注意ヲ一般的ニ明示スルカ又ハ判文所掲ノ事實ニ依リ被告カ業務上如何ナル注意ヲ爲スノ責ニ任スルヤヲ確認シ得ルコトヲ要ス

大正四年同 過失傷害犯人ノ過失カ其ノ傷害ノ唯一ノ原因ニ非ストスルモ苟モ其ノ原因ノ一部分ヲ成セル以上ハ過失傷害罪成立スルモノトス

大正十二年同 生後一年有半ノ幼兒カ鐵道線路上ニ遊ヒ居リタル際一時間十六哩ノ速力ヲ以テ進行中ナル列車ニ乗務セル鐵道機關手カ約二町前ノ位置ニテ汽糰車上ヨリ優ニ之ヲ望見シ得ヘカリシ場合ニ警戒ノ目的ヲ以テ警笛ヲ鳴ラストモ如上ノ幼兒ニ對シテ奏效セサルコトアルハ勿論ナルモ機關手ハ徐行急停車等危害ヲ未然ニ防止スヘキ機宜ノ處置ヲ講スルニ於テハ躒殺ノ虞ナカリシニ拘ラス其ノ注意ヲ怠リ何等豫防ノ方

法ヲ執ラスシテ其ノ儘進行シタルカ爲途ニ幼児ヲ轢傷シテ死ニ致ラシメタル行爲ハ業務上過失致死罪ヲ構成シ事件發生ノ當時幼児ノ監護義務者ニ過失ノ存スルト否トハ其ノ罪ノ成立ニ消長ナシ

大正十四年同 電車運轉手カ電車ヲ操縦スルニ當リ三歳前後ノ幼児カ單身其ノ進路前方ノ軌道ニ佇立シ若ハ徘徊スルヲ認知シタルトキハ其ノ幼児カ一旦軌道ヲ立去ルモ再ヒ引返シ軌道ニ立入ル處アルヲ以テ絶ヘス其ノ幼児ノ行動ニ注意シ警鈴ヲ鳴スハ勿論緩急ニ應シテ隨時停車シ得ヘキ状態ニ於テ電車ヲ操縦スル義務アルモノトス

昭和七年同 自動車運轉手ハ助手ヲ同乗セシムル場合ニ於テモ運轉ニ付テハ全責任ヲ負フヘキモノトス
大正十二年同 自動車ノ運轉手ハ業務ヲ行フニ際シ車體ニ設備セラレタル諸機械ヲ精査シ運轉上ノ故障ヲ豫防スル注意ヲ爲ス義務アルモノトス

大正十四年同 自動車ノ運轉手ハ自動車カ進行中電車ト擦違フニ際シ電車ノ後方ヨリ自己ノ進路ヲ横斷スル者ナキヤヲ慮リ何時ニテモ停車シ得ヘキ措置ヲ執リ警笛ヲ鳴ラシ徐行シ又ハ避讓スル等各場合ニ應シ機宜ノ方法ヲ講シ危険ヲ未然ニ防止スヘキ周到ノ注意ヲ用ウルコトヲ要ス電車ノ後方ヨリ車道ヲ横斷スル者モ亦固ヨリ周到ナル注意ヲ用キサルヘカラサルハ勿論ナルトモ之カ爲自動車運轉手ノ注意義務ヲ除却スルコ

トナシ從テ此ノ義務ヲ怠リ自動車ヲ衝突セシメテ人ヲ死ニ致ストキハ業務上過失致死ノ罪ヲ構成ス

大正十四年同 荷馬車挽業者ハ運送ノ途中幼児カ荷馬車ノ前方路上ニ遊ヒ居リテ數尺ノ距離ニ接近スルモ荷馬車ヲ避ケサル場合ニ於テハ單ニ危険ヲ告知スルニ止マラス幼児カ果シテ安全ノ位置ニ避難シタルヤ否ヲ究メ危害防止ニ付機宜ノ方法ヲ講スヘキ業務上ノ義務アルモノニシテ其ノ注意ヲ怠リ何等豫防ノ方法ヲ執ラスシテ其ノ儘進行シタルカ爲途ニ幼児ヲ車輪ニ觸レシメテ死ニ致シタルトキハ業務上過失致死ノ罪責ヲ免レサルモノトス

第三 書方要領

過失犯であるから過失の内容を明にしなければならない。過失とは注意義務の違反である。從て過失の内容を明にするには一定の狀況と其の狀況に於ける注意義務と其の注意義務に違反したことを表はせばよい。例へば「——斯ル場合前方ヲ注視シツツ進行スベキ注意義務ヲ有スルニ拘ラズ之ヲ怠リ右側露店ヲ見ツツ漫然進行シタル爲——」と前方を注視しつつ進行しなければならぬと云ふ注意義務と其の注意義務に違反した事實とを正確に表はす方法と「——不注意ニモ前方ヲ注視セ

ズ右側露店ヲ見ツツ漫然進行シタル爲——」と簡単に表はす方法とがある。理窟が判つて書くのであれば其の何れでも結構である。

業務上の過失犯に於ては被疑者が一定の業務に従事してゐると云ふことと業務上の注意義務に違反したと云ふことを明にしなければならぬ。前者は例へば「被疑者ハ自動車運轉者ナルトコロ」とか或はもつと丁寧に「被疑者ハ自動車運轉者ニシテ日頃其ノ業務ニ従事セルモノナルトコロ」と書く。後者は例へば「——前方ヲ注視シツ、進行スベキ業務上ノ注意義務ヲ有スルニ拘ラス（以下前同）」とか或は前者を受けて單に「——不注意ニモ前方ヲ注視セズ（以下前同）」とか書く。詳細は實例を参照されたい。

無免許運轉の場合でも夫れが一回丈でなく継続的に運轉して居り偶々事故を起したと云ふ場合は自動車取締令違反と共に業務上過失致死傷害罪が成立する。此の場合は犯罪事實に於て「被疑者ハ自動車運轉免許ヲ受ケスシテ昭和十四年一月頃ヨリ引續キ貨物用普通自動車ノ運轉ニ従事シ居リタルモノナルトコロ——」と云ふ具合に書く。

第二節 犯罪事實の實例

一 自動車ニヨル業務上過失致死（第二百一十一條）

被疑者西川登市ハ自動車運轉者ニシテ日頃其ノ業務ニ従事セルモノナルトコロ昭和十四年三月十八日午後六時十分頃大第一二八九號乗用普通自動車ヲ運轉シ時速約三十五軒ニテ大阪市此花區S町一丁目八番地先北側電車軌道上ヲ西ヨリ東ニ向ケ進行中不注意ニモ折柄北側歩道ヲ通行シ居リタル數名ノ者ニ對シ乗車勸誘ヲ爲シ前方ノ注視ヲ怠リ同軌道ヲ北側ニ横斷セントシテ前方ニ出テ來レル國見利一ヲ直前ニ迫ル迄發見セサリシ爲自動車ヲ同人ニ突當テ其ノ場ニ刎飛シ因テ同人ヲシテ腦底骨折ニヨリ間モナク死亡スルニ至ラシメタルモノナリ

二 自動車ニヨル業務上過失傷害（前同）

被疑者大石利信ハ自動車運轉者ニシテ日頃其ノ業務ニ從事セルモノナルトコロ昭和十四年一月十五日午前零時三十分頃警第八七四九號乗用普通自動車ヲ運轉シ時速約三十軒ニテ東京市麴町區A町二丁目三百九十五番地先附近疾行車道中央ヨリ稍々左寄りヲ南ヨリ北ニ向ケ進行中約六間前方同車道左側綠地帯ヨリ田中菊治當十三年カ右側ニ向ケ走り出テタルヲ認メタリ斯ル場合其ノ儘同人ニ接近スルニ於テハ同人ニ於テ自動車ノ前照燈ニ眩惑セラレ其ノ進退ニ窮スルコトアルヘキヲ豫測シ直ニ停車ノ處置ヲ執リ或ハ速度激減シテ同人ノ後方相當ノ距離ヲ隔テテ進行スルノ處置ヲ執ル等事故防止上萬全ノ處置ヲ講スヘキ業務上ノ注意義務ヲ有スルニ拘ラス之ヲ怠リ同人ニ於テ其ノ儘右側ニ走り去ルヘシト妄斷シ單ニ警笛ヲ吹鳴シタルノミニテ漫然同一速度ニテ進行シタル爲同前照燈ニ眩惑セラレ進退ニ窮シテ立止リタル同人ニ自動車ヲ突當テ其ノ場ニ顛倒セシメ因テ同人ニ約三週間ノ治療ヲ要スル傷害ヲ負ハシメタルモノナリ

三 自動車ニヨル業務上過失傷害 (前同)

被疑者三上藤之助ハ自動車運轉者ニシテ日頃其ノ業務ニ從事セルモノナルトコロ昭和十四年七月二十六日午後一時二十分頃大第九六五三號貨物用小型自動車ニ助手太田三代治ヲ同乗セシメテ運轉シ大阪市住吉區A町五丁目六十番地先幅約三間ノ道路ヲ北ヨリ南ニ向ケ進行中同所ハ幅約四間ノ道路カ東西ニ交叉シ居ル十字路ニシテ交叉道路ノ見透シ不十分ナルノミナラス交通極メテ頻繁ナル箇所ナルニヨリ事故防止上一旦停車シ或ハ何時ニテモ直ニ停車シ得ル様速度ヲ激減シ且警笛ヲ吹鳴シツ、進行スヘキ業務上ノ注意義務ヲ有スルニ拘ラス之ヲ怠リ一時間約三十軒ノ高速度ニテ無警笛ノ儘漫然進行シタル爲折柄西側交叉道路ヨリ自轉車ニ搭乘シテ出テ來レル山田吉之助ニ自動車ヲ突當テ同人ヲシテ路上ニ顛倒セシメ因テ同人ニ約二ヶ月ノ治療ヲ要スル右上膊骨折ノ傷害ヲ負ハシメタルモノナリ